
BATTLE WORLD

ヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BATTLE WORLD

【Nコード】

N8845U

【作者名】

グイス

【あらすじ】

天月劔飛は真っ白い世界にいた。

それは、BATTLE WORLDへの入口…

何なんだよさつきから…

「ようこそ！バトルワールドへ！」

突如現れた男が言う。バトルワールド？

視界を意識すれば、乗り物が沢山ある。

いや、その前に…

「誰だおまえ」

「申し遅れました。私、バトルワールドの長をやっております。レンカと申します」

何がレンカだ。馬鹿馬鹿しい。

「ではまず、このバトルワールドのルールを説明いたしましょう」

パチンと指を鳴らすと、モニターから『ルール』と書かれた画面が出て来る。

なにになに…

1 参加する者は必ず腕輪を装着しなくてはならない

2 負けたものは死

3 仲間、裏切り、スパイなどなんでもよし

4 最初は必ず職業選ぶ

なんだかわけがわからんな。
全く、こんなことやって何が楽しいのか。
そもそもなんで俺なのか。

「わからないようなので捕捉をさせていただきます。あなたは選ばれたのですよ」

「それがわけがわからないんだ！なんで俺なんだ！」

男：いや、レンカは何も言わず、姿を消した。
くそっ！

しばらくすると、アナウンスが掛かる『剣飛さま、早くお乗りください』と。

「何で俺の名前知ってたんだよ」と俺は呟き、ジェットコースターみたいな乗り物に乗る。

俺はドキドキしていた。でも、その裏腹に不安がある。

そりゃそうだろう。なんせ、いきなりなんだからな。

『GO!』とアナウンスが入ったとたん乗り物が動き出す。

乗り物のなかのモニターに職業と書かれた画面あるのに気付く。
そついや、職業を選ぶんだっけ？

迷いながら選んだのは『召喚術士』
理由？ そりゃ、カッコいいからだよ。

『OK』といわれ、乗り物と一緒にトンネルを潜り抜ける。

数分後、いきなり停まって投げ出させる。

いってえ〜、頭モロ打ったよ。

……………あれ？ここって…

「…草原？」

何で草原なんだ？

まあ、考えても仕方ないか。

「？なんだあれ」

小さい塊が浮いているんだが…

なんだあれ。っていうかどうやって召喚出来るんだ？

『それは無理です。今のあなたは手元にモンスターがいない状態ですから』

いきなりアナウンスされる。

結構今のビビったぞ。

さて、どうするかな。今の俺には武器も何にもない。

かといって逃げるわけにもいかない。あんなわけのわからんモンスターにビビっては男じゃない！

何か！ 何か棒は…

「どうして」

「え？」

一瞬、何が起こったのかさっぱりわからない。でも、これだけは言える。

モンスターが消えた。

「君、大丈夫？」

「え？あ、はい」

手を差し伸べてくれたのは女性だ。しかも、すらりとしたボディ。まさか、この人が俺を助けてくれたのか？

「こんなところで、何も持たないでいるなんて危ないよ」

「ありがとう」

「私は咲彩、ほしなサーヤ星菜咲彩。パラディン聖騎士だよ」

「俺は劔飛、あまつぎケント天月劔飛。サモナー召喚術士だ」

「ところで君はサモナーになったの？サモナーってのは、まずモンスターと契約しなきゃいけないんだよ」

「え？そうなの？」

知らなかった。俺はRPG系のゲームはしたことないからな。とはいえ、格ゲーも好きってわけじゃない。やるとすれば育ゲーぐらい

だ。

自慢ではないが、そういうのは得意だ。

「ねえ、私と手を組まない？」

唐突に言う。

確かに仲間などはOKって言われたが、見ず知らずの人とは手は組めん。

いつ裏切るか解らないし。

そもそも俺はこんな馬鹿らしいモンに付き合っではいられない、帰って学校に行かなくちゃいけないし。

「私が居なければあなた、死んでいたわよ」

あんなわけのわからんモンスター…しかも弱っちそうな奴にやられるわけない。

いや、やられたとしてもダメージないはずだ。あつたとしたら、5か10ぐらいだろう。わからんが。

「あれ、毒持ちよ」

咲彩^{サーヤ}が指を指す。

向けた先は骨。あれはなんの骨だ？

見たところ人つぽいが…

さすがに人だとマズい。

「……人よ」

「え？」

案の定だ。でも、俺は大丈夫だよな！ 友達から訊いたが、俺みたいなジョブは防御とHPが高いって言ってるし！
うん、大丈夫大丈夫！

「今のあなたはLV1、HPはだいたい15あたりだから…2回ぐらい攻撃を受けたら死ぬわ」

「……」

まさか、そんなに弱いとは…

「だから、私と手を組むの。そしたら強いモンスターも手に入れられるし、私もLVがアップする。一石二鳥じゃない」

この女の言うとおりがもしれない。

……ま、暇潰し程度にはなるか。

どうせ戻れるかわからないだし。

「わーたよ」

しぶしぶハイタッチして歩き出す。

これから俺、劔飛と咲彩との冒険が始まる。

契約

俺がバトルワールドに来てから2日たった。

寝泊りは当然野宿だ。とはいっても、野宿は1日目だけどね。

そっぴゃ、咲彩は何でバトルワールドに来たんだ？

まあ、どうせあの男から強制的に連れてこられたんだろ。

しかし、俺の契約するモンスターは何になるのか。ザコいモンスターだったらいらないし。

いや、でも実際弱いやつほど強くなる確率が高い。地道に育てていくしかないな。

「劔飛、モンスターよ」

咲彩は戦闘体勢に入る。

くっ、まさか女子を頼りにするとはな。俺ながら情けない。

相手は鳥系のモンスター、バーディア。

ちっこくて素早い代わりに攻撃弱い。多分、咲彩ならやってくれるだろう。

「はあ！」

咲彩の大剣がバーディアに向かって振り上げられる。

しかし、バーディアは後ろに下がり、空へと飛んだ。

それを平然と見ている咲彩。

何してんだよ！

「……ねえ、あの子欲しいとは思わない？」

咲彩が突然言う。何言ってるんだ？確かに欲しいけど、どうやって契約すんだよ。

俺はそんな知識はない、そもそも何であるのバーディアのことがわかったさっぱりだ。

なんか、モンスターなら何でも知ってる感じがする。

「大丈夫、あんたなら出来る」

「何を根拠に…」

いや、俺はサモナーなんだ。やらなくてどうする！やり方は俺の中の脳が教えてくれるはずだ。

俺は神経を自分の脳内に集中する。

さあ！教えてくれ！

よし、やり方はわかった。

「咲彩！まずバーディアを弱らすんだ！」

咲彩は小さく頷いて、バーディアに斬り掛かる。

よし！攻撃が当たった！これでだいぶん弱ったはずだ。

「我は召喚術士、汝の名はバーディア、汝は我と契約し、我が剣となり盾となる」

魔法陣に俺とバーディアが包まれる。あと…もうちょいだ。

スパアアアンと音がすると、バーディアの姿が見当たらない。どうやら成功したようだ。

……結構、疲れるんだな。

「よかったね劔飛！」

「ああ」

やべっ、膝がガクガクだ。立つのもキツイや。

「んっ」

咲彩？

いきなり腰を降ろしてきた。どういうことだ？

「乗りなさいよ」

「は、はあ？」

何言ってるんだよ！ 何で俺が女に担がれなきゃいけないんだ！
大体俺は…

俺が思いかけたとき、咲彩が言う。

「あんだ、今立ってないんでしょ？しょうがないじゃない」

有無も言わずに背負いだした。

ちよっ！ハズいって！

「ごちゃごちゃ言わない、行こう」

この天月劔飛、一生の不覚！

咲彩におんぶされて数分、やっと村に着いた。
見たところ結構荒れている村だな。

「盗人だ！捕まえる！」

「「え？」」

俺と咲彩が振り向くと、その盗人がこちらに向かってきた走ってきた。
た。

よし、さっき契約したバーディアで…

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディアア！」

魔法陣からバーディアが現われる。

さて、行くぞバーディア。

「バーストフレイム！」

バーディアは炎を纏い、盗人に向かって突出する。

「っつ」

「何？」

避けられた…そんなバカな！

何なんだこの盗人は。バーストフレイムを避けれるなんて…！

「流斬！」

大剣で横に斬り裂く、が…

「よっ、甘い甘い」

咲彩のわざでもダメか。ホントに何モンなんだ。咲彩も落ち込んでるみたいだし。

「えっ？もう終わり？」

コイツ、舐めやがって…！

ぶっ飛ばす！絶対えぶっ飛ばすうう！

「バーディア、炎灰^{えんかい}！」

バーディアの翼が鋭い炎と化す。そして、素早く貫く。

「よっと…ニヒヒ、お前ら弱いね」

「チッ」

また避けられた。どういう…いや、考えても時間の無駄か。

「やるじゃない」

「咲彩！」

何のんきなこと言ってる！相手は強いんだ。

……そうか、そういうところか。咲彩はコイツを…

「ねえ、あんた名前は？」

「俺様か？俺様は御纏ごでんいちほつ一初いちつてんだ」

「そう。なら、私たちの仲間にならない？」

お、おいおい…

「はあ？」

そりゃそういう反応するよ。

でも、確かに腕はよさそうだが、俺らの仲間になるのは…

「無理に決まってるんだろ？俺様は盗賊シーフだ。お前らに付いていくほど人間出来ちゃいないんだよ」

ま、妥当だね。俺もこんな奴仲間にはかないもん。

「そう、残念ね。君とならいいパーティーになりそうだったのに。行きましょ。劔飛」

「あ、ああ」

俺と咲彩は村の宿屋で体を休めた。

ふう、今日1日大変だったな。バーディアとも契約したし、これから旅をしていく仲間だ。

「頼むぜ、バーディア」

契約（後書き）

（前衛系）

ファイター・ウォリアー

戦士

アマソネス・アマゾン

女戦士

バーサーカー・ヘルセルク

狂戦士

マジックウォリアー

魔法戦士

ソドマン

剣士

グラディエーター

剣闘士

エグゼキューション

死刑執行人

ソルジャー

兵士

ガード

衛兵

ドラグーン

竜騎兵

インベリアルガード

近衛兵

ディフェンダー

防衛者

ガードリアン

守護者

ジェネラル

将軍

ナイト・キャバリアー・シュバリエ・リッター

騎士

パラディン

聖騎士

テンブルナイト

聖堂騎士

クルセイダー

十字軍

バンディット

山賊

海賊（パイレーツ・バツカニア・バイキング・コルセア）

マーセナリー・ハイアリング

傭兵

バーバリアン

蛮族

ジエノサイダー

虐殺者

侍

ロード

ハイランダー

マーチャント
商人
クラフトマン・クリエイター
職人
ブラックスミス
鍛冶師

格闘系

武道家

モンク

拳聖

空手家

ごろつき

喧嘩師

軽業師

気功師

護身術士

パンクラチオン

グラップラー

ストライカー

軽装・中衛系

盗賊
シーフ・ロバー・ルーター・ブリガンド

ならず者
ローグ

追跡者
チェイサー

暗殺者
アサシン・スタッパ

野伏
レンジャー

忍者
ヘガー

乞食
シフシー

放浪者
バード・ミンストレル・ドルバドール

吟遊詩人

弓使い（ボウマン・クロスボウマン）

アーチャー・シューター

射手

ハンター

猟師・狩人

スナイパー

狙撃手

（魔術師系）

見習い（アプレンティス）

ハーミット

隠者

ウオーロック

男の魔女

ウィッチ

魔女

魔術師（ウィザード・マジックユーザー）

ソーサラー・ソーサレス

妖術士

シャーマン

呪術師

イリユージョニスト

幻術師

セイジ・ワイスマン

賢者

獣使い（ビーストテイマー・ビーストマスター）

スカラー

学者

フオーチュンテラー

占い師

メイジ

アークメイジ

バトルメイジ

メイガス

デアボリスト

ウイスパー

囁く者

サモナー

召喚術士

ネクロマンサー

死霊術士

エレメンタリスト

精霊術士

アルケミスト

錬金術師

アストロジスト

占星術士

（僧侶系）

ドルイド僧

薬草使い（ハーバリスト）

クレリック
牧師

祈祷師・退魔師・除霊師
エクソシスト

法皇・教皇
ハイエロファント

ハイプリーステス
女教皇

カーディナル
枢機卿

ビショップ
司教

プリースト
神父・司祭

ディーコン
助祭

アコライト
侍祭

この中ジョブを選んで、名前を考えて下さい。

必要な事項は名前、性別、ジョブ、備考などを書いてくれるとありがたいです。

姫の救出へ！

「さて、そろそろ行こう」

とある朝、咲彩が言う。確かに、もう出発しなきゃな。シーフがいる村なんて長居はしたくない。バーディアの鍛練もしなきゃいけないし。

「お世話になりました」

「気を付けるんだよ」

「はい」

宿屋のおばさんにも言ったし、後はこの村を出るだけだ。

咲彩は「あの盗賊の子、欲しかった…」とか言ってる。いやいや、さすがにあいつを仲間にするのは俺が困る。なんか体が拒否反応するんだよ。

歩いて数分、俺は怪しげな影を見つけた。誰だ？

「おい、こそこそやってないで出てきたらどうだ？」

「ばれましたか」

出てきたのは黒い帽子を被った女。

見た目からして魔女ウィッチだろ。

「名を名乗れ」

咲彩が言う。

しかし彼女は、何も言わずこちらに向かってき歩いてきた。

「私は魔女、^{ウィッチ}ケイト＝ミドルトンですわ」

「で、そのケイト＝ミドルトンが俺らに何用だ？」

ケイトは水晶を出すと、その中に文字が浮かび上がる。

ま、ウィッチだから当然か。

「…これって…」

咲彩が驚く。無理もない、王の娘が連れ去られたみたいだからな。でも何で俺らなんだ？普通強え奴を呼ぶはずなんだが……まあいいや。

「では、付いてきてください」

ケイトの言うとおりに付いていくと、デカイ屋敷にたどり着いた。結構デカイな…相当な大富豪だろう。

「お入り下さい」

「「おお〜」」

中も結構広いな。さすが王様ってところか。

ケイトが「こちらへ」と言われ、着いたのが小さい扉。

俺ん家に比べりゃ断然でかいけどな。

「ん？何だお前ら」

現われたのはラフな格好した奴と…

「あ、お前ら！」

「いつかのシーフ！」

そう、なぜかあん時の盗賊^{シーフ}がいる。

とうとう捕まったか？

等と考えていると、ぬっ、と鏡が出される。

咲彩は「ヒイツ」と悲鳴を出し、俺の後ろに隠れる。

コイツ、怖いのが苦手なのか？

「おっちゃん、こんなとこで何してんだ？」

ラフな格好した男が言う。

ま、俺としても訊きたいしね。

「ワシの名はユウキ・カタノ、見ての通り王をやっておる。しかし、ワシはオーガに娘を攫われて、拳げ句の果てに鏡に閉じ込めたのじや」

おいおい、そんな童話の中の話じゃないんだから……いや、今の俺らにはモンスターとかいるしな。

そもそも王はそんなことでウソを付かないはずだ。

第一、よくよく見ると結構強かったシーフもいるし、強そうな男もいる。

俺らはオーガを倒すべく為の準備をした。

「そついや、お前なんて言つんだ？」

シーフが言う。

確かにそつだ。連携の時に呼び合わないと困る。それに、自己紹介ぐらいしないと。

「俺様は御纏一初。盗賊だ」

「俺は吾神^{あがみレント}鍊斗。ジヨブは鍊金術師^{アルケミスト}。よろしくな」

「私は星菜咲彩。聖騎士^{パラディン}よ」

「俺は天月劔飛だ。ジヨブは召喚術士^{サモナー}」

それから俺らは次々と自己紹介をしていき、意外なことが発覚した。それはこの鍊斗って人は12の時からバトルワールドにいるらしい。まあ、見たところ強そうって思ったけど、案の定とは…

「おーい、武器改造終わったぞー」

鍊斗さんが叫ぶ。

鍊斗さんはアルケミストだから俺らの武器を改造してくれてるんだ。結構いい人だし。

で、俺はバーディアしかいないから改造出来ない。

咲彩は冷気を纏った大劔『アイシクル』、一初は雷を纏った短劔『

ざまあだな。

「おい、どうでもいいが進まんのか？」

っと、そうでした。取り乱してしまっただ。

こうして俺らはオーガを倒すため、洞窟に足を踏み入れる。

虐殺者

「ねえ、錬斗さん。錬斗さんは何で姫を助けに？」

「ん〜、俺あは曲がったことが大ッ嫌いなんだよな。王をあんたとこへ閉じ込めて何がいいんだか」

「コンマ置いて「はあ」と言う錬斗さん。結構正義感が強いんだ。それに比べてこの盗人は何で参加したんだ？ま、どうせ面白半分で来たんだろう。」

「ヘッ、俺様はオーガをぶっ倒して強くなる！」

何だ。意外と普通なんだな。

「あら、私と同じ理由とはね」

咲彩もこの盗人と同じ理由か…なんか分かる気がする。俺もこの世界ワールドに来たからには少しでも強くならなくちゃな。などと考えていると、早速現われたのは漆黒と深紅の翼をもつコウモリ、コクバッド。確かコイツは…

「たありゃあ！」

俺がこのモンスターを確認する前に、一初は攻撃を仕掛けた。このモンスターの特徴…それは水の力。となるとバーディアはキツイ。なら、咲彩の『アイシクル』だ。

「咲彩、コイツは水の力を持っている。今の咲彩が適任だ」

咲彩は「こくん」とうなずき、力を溜める。
一方一初はコクバッドと乱戦している。思った以上に強いのか、手も足も出てない。

「退いて！」

咲彩が叫ぶと一初は横に避ける。そして咲彩は退いたのを確認して真上にジャンプ。

「我が冷気は汝の命を奪わんとする（オア・フリングス・イト・レピット・アニマン・トゥーム）。吹雪の斬撃！」
レジェン・イン・スノーストーム

コクバッドめがけて吹雪のような斬撃が襲い掛かる。
よし、これでなんとか倒せた。

「ふう」

さすが聖騎士だ。疲れは少しだけとは。
んで、一初の様子を見ると結構疲れてるっぽい。まあ、コイツにとっては対モンスターは初めてだから仕方ない。
そして俺らは次々と洞窟の奥に進む。

「行き止まりだな」

錬斗さんの言うとおり、目の前は壁で、何も仕掛けなどなさそうだ。

「仕方ない戻るか」

と、その時。ギギッと扉が開く音がする。隠し扉か。

中に入ると辺りが暗くてよく見えない。

「な、なあ。あれ人じゃないか？」

一初が言う。俺も目を凝らしてみると、男性が椅子に座っているのが見える。

確か俺らはオーガを倒しに来たはずなんだが…

「フンッ」

そういつて放り投げたのは…

「オーガの首……」

多分、錬斗さんか一初が言ったんだろう。俺は驚き過ぎて聞く耳持たなかった。

いや、今はそこじゃない。

相手はあのオーガだ。例えどんなに強いヤツが1人で戦っても無傷で生き残れる奴は居ない。

しかもこの男は返り血を浴びている。否、浴びまくっている。

「俺様、あの男見たことある……」

「え？」

少々びびりながら言う。そう言えば俺も見たことがあるような……

「劔飛、咲彩、一初。逃げろ……」

「なっ！？そんな…錬斗さんを置いて逃げるなんて」

「 コイツは全国指名手配犯。無差別殺人鬼……」

男を見て錬斗さんは言う。

「岩見祥吾だ！」

そう、この男は錬斗さんが言う無差別殺人鬼、岩見祥吾。数年前脱獄して行方不明となっていたが、まさかこんなところにいるなんて……！

「まずは……誰から殺^やる……？」

う、動けない……体が……

「まずはお前からだ……」

サツと現れたところは一初だ。くそっ！ 身体！ 動け！

岩見は一初の頭を握り締める。くっ、こんな時に何で……！

「あ……あ……くっ……」

何で動かないんだよ！

「俺の眼は誰もが跪^{ひざまず}く……お前らはここでコイツの死刑を見ている」

出てきたのは血塗れの刀。

コイツ、まさか一初の首を刎ねるつもりじゃ……！

亡くなった友のために（前書き）

今回は雨季さんが投稿してくださったオリキャラが出ます。

亡くなった友のために

一初…俺はなぜお前を守れなかったのか…

俺は弱い。悔しい。何も出来なかった故にお前を死なせちゃまって…

もう、いやだ。俺はもう戦いたくない。もう誰かの死は見たくない。抜け出したい。

もう……………いやだ…………

「劔飛…」

「劔飛。立ち止まっている時間はない。オーガを倒したが、王の娘を助けに行かなくてはならないのだ。気持ちは分かるが、いつまでもここにいたら一初だって安らかに眠れない」

「何で…………何でアンタは人が死んだのに平気でいられるんだよ！」

「平気なわけないだろ！」

鍊…斗さん…………？

「俺らがやらなきゃいけないことはなんだ？一初の墓の前でメソメソ泣くことか？違うだろ！俺らは姫を助け、王を鏡の中から出すことだ。違うか？」

そうだよな。いつまでもメソメソ泣いていたら一初に笑われちゃう。俺は鍊斗さんの言葉で自分が何をしなきゃいけないのか分かった気がする。

まずは姫を助け、王を鏡の中から出す。考えるのはそれからだ。それに…あの岩見ってヤローをぶん殴らなきゃ気が済まねえ。

今の俺は無理だ。それは事実。だが、そこから強くなるってこと証明してやる。

その為にも仲間を増やしていこう。

「ねえ劔飛。あそこの扉って…」

咲彩が指差したのは奥にある扉だ。ここに閉じ込められている可能は大。なら、急いだ方がいいな。

俺と鍊斗さんは扉の把手に手を掛けて、一気に引く。すると、目の前に扉がうずくまっていた。

中は暗いし少し寒い。それにクモやら虫がちよこちよこ歩き回っている。なぜ姫をこんなところに閉じ込めたのかは不明だ。だが、これで姫は助けた。後は王を元に戻すのを…アレ？

「なあ、咲彩。王を元に戻す方法」

「知らない」

だよなあ、どうすりゃいいんだよ。オーガは死んじまったし…はあ、あの岩見ってヤロー…それを知りながらアイツは…！

「あ、あの…！」

突然姫がみんなに言う。「もうパパは鏡から抜け出したよ」と。俺らは急いで屋敷に戻り、王の無事を確認する。

すると王は既に鏡から出ていて、ご飯をもりもり食べていた。

つまりあのオーガを倒せば鏡から抜け出せるって事ね。

その晩王は俺らにご飯をご馳走してくれた。結構美味かったりして。それからこの屋敷…否、この町を出る日が来た。

鍊斗さんは俺らと共に旅をする事になった。いきなり「俺を仲間に

してくれ！」なんて頼むからビックリした。
咲彩は引き続き俺と一緒に旅をする。俺としては嬉しいことだ。『仲間』が出来るんだからな。だが、その裏腹に『裏切り』という行為も考えられる。
裏を掻いたり掻かれたりのバトルワールド……やってやるよ。

俺らはシラマ砂漠を歩いている。確か、この先にミズナ村という村があるそうだが……ホントにこのルートで合ってるのかよ。辺りは見回しても地平線だし、何も無いじゃん。
そんな時、1人の左腕がない男性と会う。その姿はレザー装備にボロボロのスカーフとマントを身につけている。髪は金髪で背が高い。恐らく外人だろう。

「初めまして、ロン・ハワードです」

「こちらこそ、天月劔飛です」

「吾神錬斗だ」

「星菜咲彩よ。よろしくね」

この男の用件は俺らと同じミズナ村を目指している。だが、一向にミズナ村が見えないから不安になり、同行をお願いされたのだ。
確かに、進んでも進んでもミズナ村に着かない。これじゃ俺らは飢え死にだ。それだけは回避したい。

「感謝するぜお前ら！」

ロンが俺らと同行してから数時間。さすがに疲れてきた。咲彩の『アイシクル』だけじゃ厳しいよ。それにこの状況でモンスターが出たら厳しい。今の俺らはこの暑さで体力を奪われているんだ。そこにモンスターが来たら一溜まりもない。

「ん？」

錬斗さんがいきなり停まり、息を潜めた。何かに気付いたのか、武器を構える。

咲彩とロンも、錬斗さんに続き武器を構える。なら、俺もバーディアを喚びだそう。

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディアア！」

それぞれが息を殺し、モンスターが来るのを待つ。

そこで1つ疑問が出来た。

それは…

『ロンは片腕だけで戦えるのか？』

ロンの武器は大剣。故に『片腕だけでその大剣を操れるのか』と俺は疑問視してしまう。

だが、そんなことも忘れ去られるようにモンスターがウジャウジャ出て来た。

あのモンスターの名は『クラブヘッド』。砂漠で生息するのが特徴な力二。

あの前脚のハサミに挟まれたら木っ端微塵だ。

それにあのカニの能力は、地面に潜り、相手の真下から引きずり、地面の中で食すというえげつなことをするモンスターだ。

「相手は50…いや、60体か……」

ロンはぶつぶつと言って、ある事を言う。それは…

「俺ら4人なら30分で行けるだろう」

俺らの実力を知らないで言ってるのかはわからないが、たった30分で60体のモンスターを倒せるのか…？ いや、倒してみせる！俺とて無駄にここまで歩んできたわけじゃない。ロンの言うとおり30分で終わらす。否、30分以内で終わらす！天国いる一初に笑われないように、絶対30分以内に終わらしてみせる。

亡くなった友のために（後書き）

まだまだオリキャラを募集しております。

必須項目は

名前

年齢

性格

生い立ち

容態

武器

防具

能力（二次小説ではないので、チート過ぎはダメ）

例：何でも武器、道具を作れる等。

はダメ

職業

です。

上記の通りに書いてくださらないと、混乱してしまいます。

ちなみに投稿してくださったオリキャラは、どこで使うかは秘密です。

使わないことはありません。

最後に天月劔飛の年齢は18、星菜咲彩は17です。

判らないことがあったら、遠慮なくメッセージを下さい。

では、投稿待ってまゝです。

V Sクラブヘッド

「バーディア！バーニングスラッシュだ！」

俺とロンと錬斗さんと咲彩はクラブヘッドと戦っている。

俺とロン、錬斗さんと咲彩のコンビで倒すことに決まった。さて、コイツの戦闘スタイルをお手並み拝見と行くか。だがその前にコイツらをなんとかしなくちゃな。

つつてもこれじゃキリがない。手っ取り早くコイツらを倒す方法を見つけなくては。

俺は必死に考えを探ってみた。こういう時のサモナーだろうが！
くそっ！

「………待てよ………」

相手は主に地中で暮らしている。ならば地面ごと叩けばいい。だが、どうやって地面ごと叩く。生憎俺のバーディアじゃ力不足だ。くっ、こつという時に地のモンスターが欲しい。いや、無い物ねだりしてる時間はない。他に方法を……

「！」

「たああああ！！！！！！」

ロンは片手だけでクラブヘッドを振り払う。

すげえ、片手であの大剣を軽々と……それにあの破壊力……いけるかもしれない。

ロンのあの破壊力があれば倒せるかもしれない！

「ロン、話がある」

劔飛SIDE OUT

ロンスIDE

ケントが俺に話があると言って、側に寄ってきた。

耳を傾けると、俺にあることを言った。それは『地面を叩け』という提案。

ケントのことだから何かしら策があるのだろう。

俺は深呼吸をして、大剣を構える。

「大震鎧だいしんがい！」

思いっきりジャンプして、勢い良く地面に突き刺す。

すると、クラブヘッドが沢山出てきて宙を舞う。なるほど、ケントはそれを予想していたのか。

俺が驚いていると、ケントはバーディアに攻撃の指示を出す。

「バーディア！炎璋烈えんしょうれつ！」

バーディアの翼とクチバシが燃えだして、空中にいるクラブヘッドをある程度倒した。

どうしてある程度なんだ？ まだいるだろう。

「後はお前の仕事だよ。ロン」

そういう事か…なら、お言葉に甘えて…

「スピードダム…！」

素早さが上がる術を自分に向け、横に構ええる。

そして1コンマ置いて、高速で斬り付ける。俺の能力はちょっと厄介だ。スピードアップならスピードアップ。と、1つしか出来ないから何回も何回も斬り付けなければならない。

よし、LAST！

「はっ！」

最後の1体を渾身の一撃で倒した。

ふう、やっぱり疲れる。あまり使わないほうがいいな。

ロンスIDE OUT

錬斗SIDE

「たああありゃああ…！！！！！！」

次々と俺のハンマーで殴り飛ばす。ハッ！ アルケミストだってやるときゃやるんだよ。

普段は武器を鍛えてる俺だが、ここぞと言うときのために鍛えてよかった。

チラ見で咲彩の方を見る。

すると咲彩はクラブヘッドを容赦なく斬り刻む。さすがパラディンと言ったところか。

「昇黎氷斬！」
しょうりひやうせい

咲彩は2回斬り上げ、そのまま地面に叩きつける。
全く、あの小さい身体にどんなパワーを秘めているのやら。
それよりもあのクラブヘッドのハンマー…俺の武器を進化するのに
最適だ。よし、持って帰ろう。

その前にクラブヘッドを倒さないと武器が造れない。倒して強えハンマー造る。

「峨梁塵碎！」
がりやうてんさい

ハンマーを回転しながら叩く。一体一体しか倒せないが、攻撃力がかなりある技だ。

もうちよつと鍛えたほうがいいな。それに改良の余地がある。あと、この『ポイズター』も改造したら、より威力が増すだろう。さて、劔飛達の方はどうか？

そう思ってそっちに目を向けると、すでに全滅していた。すっげえ、こっちはまだまだだっただけなのに。それにロンってヤツ、何者なんだ？ 片手だけであの大剣をフツーに振り回すなんて有り得ないだろう。

いや、実際ここにいるんだ。否定出来ねえか。

錬斗SIDE

咲彩SIDE

うっわ、もう劔飛達早く倒しちゃったよ。さすが私の見込んだ人。

例の作戦を実行するにはまだ早そうだし、もうちょっと様子見ようかしら。

にしても、ウッフ…バカな男よね。私の演技に騙されるなんて…さすが私、天才女優と言うだけあるわ。

何としても私はこのバトルワールドで天下を取る。そして私を貶めたプロデューサーに借りを返さなきゃ。

「フフツ…アハハハハッ」

この恨みは消えない。絶対にね。

咲彩SIDE OUT

何ものかに取り憑かれたように笑う咲彩。

そしてこのバトルワールドとは何か…はたまた、咲彩の過去とは一体何か…謎が多すぎるこのバトルワールド。その正体はいかに…？

VSクラッシュヘッド(後書き)

バトルワールドとは一体何なのか…それはまだ明かされない…

2つの職業

「だから！俺はお前を信用してだな」

「はいはい」

どうも皆さん。天月劔飛です。「厨二っぽい名前だな」とかその辺のツッコミは無しね。

で、今口論してんのがロンと咲彩。原因はこのシラマ砂漠を東に歩いているときだった。

何せ暑いから、咲彩のアイシクルで涼しもうとしていたが、ロンは「いや、お前の魔力が減る」と言うが、対する咲彩は「そのくらいじゃ減らないわよ」と言う。それで今に至のだ。結構暑いのにこの2人のせいで余計に暑くなる。

「おかしいな……確か、この方角で合ってると思うんだけど……」

「何してるんですか？錬斗さん」

「いや、俺ら道迷ったかも……」

錬斗さんの発言で一瞬時が止まったように感じた。

そっか、迷っちゃったか……まあ、しょうがないよね。俺ら初めて来たから迷うのもうなずける。

でも、ガチでどうしよう。とりあえず近くの村……って、砂漠にそうそう村なんてないよな。

「あ、村発見」

「「ウソお!?」「」

俺と鍊斗さんとロンが咲彩の一言にツッコミをいれ八毛る。
ミズナ村以外ないはずなんだが……怪しいな。
そう思いつつ俺らは咲彩が言う村に行く。

さてと、まず村の第一印象はとても貧しそうだ。村のみんなが俺らを睨んでいる。どうやらここはよほど荒れているようだな。
さて、この様子では俺らを歓迎なさっているようではない。

「劔飛、村の様子が変だ」

「ええ、何かに操られているようだわ」

鍊斗さんと咲彩が戦闘体勢に入り、俺もバーディアを召喚。ロンもドデカイ大剣を構える。
そして村の1人が鍊斗さんに襲い掛かる。すると、鍊斗さんは躊躇なく村の1人をハンマー ポイスターで叩きつけた。ちよっ！ 何してっ……！！

「よく聞け、コイツらの正体はモンスター『スケルス』だ」

スケルス…人間に擬人して獲物を捕える。コイツの厄介なところは人間に上手く擬人して、サモナーでも見分けることが出来ない。なのに鍊斗さんは……

「おい！劔飛後ろだ！」

「えっ？」

ふと後ろを見るとスケルスが俺に攻撃をしようとしている。しまった！ボーツとしていたら後ろを取られた…っ！
くっ…そ、ここで終わりかよ！

「入江流一式 四之舞“くんじょうさいか群青催狩”」

俺の顔スレスレに矢が飛んできた。あつぶねえ…だが、今の矢が無ければ俺は死んだかもしれない。

「全く、僕が居なければキミ死んでたよ」

現われたのは黒の髪に赤い目。髪の長さは腰まである。恐らくこの娘は射手アーチャーだろう。

「速攻で終わらすよ！」

女性は5本の矢を構えて上に放つ。すると、雨のようにスケルスに当たる。すげえ、あんな的確に当たるなんて…いや、感心してる場合じゃない、俺もやらなきゃ！

「バーディア、クロスバーニング！」

翼を広げ、右、左、上、下へと十字を描くように突撃する。そして最後は炎を纏ってスケルスの腹めがけて突進。だが、数が多いのかあまり減ってない。

「もう！これじゃあ僕が1人でやったほうが数倍マシだよ！」

そう言うと、彼女は矢を取り詠唱を唱え始めた。

「風の精、私の矢に汝の力を与えよ。風の乙女『シルフ』」

矢から凄まじい風が起こる。これが、風の精霊の力…あれ？何でア
ーチャーなのに精霊を……？

「行くよ、シルフ」

『わかったわ』

！？ 今変な声が…気のせいかな？ でも、確かに聞こえたような…
しかも女性の声。咲彩、錬斗さん、ロンに聞いても知らないと言う。
やっぱり気のせいかな。

「ふうがれっしょう風雅烈昇！」

勢いよくスケルスに向かって放つ。本当に何者なんだ？精霊を使う
わ弓は使うわ。余程の者とみる。
そんなことを思っていると、ぬっ、女性が顔を出す。

「な、なんだよ」

「キミ、僕のこと知りたい？」

「え？あ、いや…」

正直何言っているのかわからなかった。だって、敵も味方もわから
ない奴から自分を知りたいと言うのは怪しい。少し気にはなるが、
あまり気にしないほうが良い。それが安全だ。

「いや、俺は別に」

「しょうがないなあ。教えてあげるよ」

話聞いてな！俺一言も教えてなんて言っていないよ！
考えていた俺がバカみたいじゃん！

「僕の名前は入江安曇。いりえあずみアーチャー エレメンタリスト
射手と精霊術士」

ジョブが2つ…どういうことだ？ジョブは1人1つのはずじゃ…
…あのレンカって奴も2つまでとは言っていないはずだ。

「知らないのかい？LEVELが30になるとジョブが2つになれるんだよ」

知らないも何もそんなこと聞いていない。いや、聞かされていない。
それから俺らは入江の話聞いて1つ気になった単語がある。

年に一回開催されている大会『Battle of battle』だ。

その大会で優勝すれば元の世界に戻れると言われている。でも、参加資格はLEVEL50以上。つまり俺らはまだ出れないのだ。これじゃあ歳を取って死んじまうじゃねえかと思っただが、ここでの俺らは不老になる。

で、この話はロン、咲彩、する知らなかった。

「俺も知らなかった。まさか、ここから出られるなんて」

長年いた錬斗さんでさえ知らなかったのか。全く、ますますわからなくなっちゃったよ。このバトルワールド。

そして、入江はこんなこと言う。

「しょうがないよ。だってハーツ大陸にはそんな情報届いてないらしいし」

ハーツ大陸？

俺が疑問の顔をしていると、鍊斗さんが捕捉するように言う。

「ハーツ大陸つつうのはこの大陸だ。この世界ではこのハーツ大陸、クローブ大陸、スペース大陸、ダイアンツ大陸の4つの大陸で成り立っている。まだまだ強エヤツはいるってこと。ま、俺はハーツ大陸を出るのは初だけだな」

なるほど、そういう事か。

何はともあれ、もうこの村とはおさらば、そして多分咲彩は…

「私たちの仲間にならない？」

や、や…

「「「やっぱりい〜…」「」」

俺とロンと鍊斗さんは声を揃えて膝をつく。うん、まあ、想像していた通りなだけだね。で、返事は…

「無理」

はい、最悪の二言ですましたー！ しかも真顔でー！

「じゃあ、僕帰るから」

2つの職業（後書き）

今回はこれまでに登場したキャラを紹介したいと思います。

キャラ設定(前書き)

仲間になったキャラです。

キャラ設定

名前：天月劔飛あまつぎけんとう

性別：男性

年齢：17

職業：召喚術士サモナー

特殊能力：モンスター情報
モンスターについてなら誰にも負けないほど詳しい。ただし、ハーツ大陸に住むモンスターだけ詳しいので、他の大陸のモンスターは知らない。

身長：169cm

体重：60kg

髪型：カジュアルショート

髪色：えんじ色

瞳：サックスブルー

契約モンスター：バーディア（炎属性）

前：星菜咲彩ほしなさいや

性別：女性

年齢：18

職業：聖騎士
パラディン

特殊能力：大嘘
オールフィクション

彼女が演じると本当のようになる。

身長：157cm

体重：54kg

髪型：ポニーテール

髪色：水色

瞳：ダークブラウン

武器：アイシクル（氷属性）

名前：吾神錬斗
あがみれんと

性別：男性

年齢：18

職業：錬金術師
アルケミスト

特殊能力：属性追加
彼が鍛えると何かしらの属性が付く。ただし、ランダム。

身長：178cm

体重：77kg

髪型：ざんぱら

髪色：金髪

瞳：漆黒

武器：ポイズター（毒属性）

名前：ロン・ハワード

性別：男性

年齢：25

職業：剣士
ソードマン

特殊能力：馬鹿力
片手だけで大剣を振るほど力が強い

身長：188cm

体重：98kg

髪型：ツンツンヘア

髪色：金髪

瞳：青

武器：キング・リューザ（属性なし）

バラバラになった仲間 剣飛&ロンSIDE

「さて、なぜ俺はここにいるのかな？」

「……」

無視ですか…

うむう、まずはここに来るまでの記憶をたどろう。

俺らは確かミズナ村に着くには最短の道の『コクラ洞窟』に行っただけ、途中から道に迷い、練斗さん達と離ればなれになりそれから……そう、確か謎の女2人に連れ去られてここにいるんだ。

「おいつ！お前らの目的は何だ。悪いが、お前らが思っているほど金はないんだ」

「ああ、いいいいの。ウチらのお金目的じゃないし。ウチらの目的は……」

俺の前に立ってこういう。「アンタを仲間にする」と…

まさか俺がスカウトされっとはな。しかも見たところ海賊っぽいし。てか、何で山の洞窟に海賊いるんだ？近くに海でもあるのか？

「ウチたちは海賊をやっている」

知ってるよ。だって格好がそれっぽいし。

「そしてウチはその海賊の船長をやっているんだ」

マジか！？ そんな風には見えないぞ！？

「でも、ウチたちはかなり弱い。他の海賊たちにも相手にされない」

いや、それは逆にいいのでは？ ん？いや、待てよ…まさか…

「民にも相手されない」

やっぱりー！！ だいたい予想は着いていたけどいざ聞くと切ない…っ！

「綾子さん、さすがにそのウソはばれるのではないのでしょうか？」

「ウソかよ！俺ガチで信じちまったよ！」

「えっ？アレを信じたの？やっすーいー」

あれ？目から水が流れてきたぞ？
でも、1つだけ気になるのがある。なぜ俺を連れ去られたのか。錬斗さんや咲彩ならまだしも俺はここに来たばかりだ。そんなに強くはない。むしろ弱いほうだと思う。

「なあ、何で俺を仲間にするんだ？どうせなら俺より強いヤツを仲間にしたほうが…」

「それはダメなんです。私たちに必要なのはサモナーなんです。他の人たちはいりません」

サモナーでないといけない理由でもあるのか？ それとも、何か企んでいるとか……

いや、考えすぎだろうか。そもそもサモナーと何の関係が

「船長！デットゴーレムがこちらに向かってきます！しかも、かなりの数で…」

1人の乗組員が慌ててこっちに来る。

それにデットゴーレム…確か、近づくヤツを容赦なく殴り殺すというモンスター。しかし、それはヤツらの縄張りに入った時のみだ。普段は大人しいと聞いたことある。

「なんだって！急いでデットゴーレムを」

「待てよ」

俺はデットゴーレムのところに行こうとする船長を止める。少し聞きたいことがあるんだ。デットゴーレムに関して。

「な、なによ」

「お前さ、デットゴーレムに何かしたのか？」

「っ…」

よし、動揺した。何か隠しているな。この調子で追い込めば…

「キヤー！」

デットゴーレムが1人の女性を殴りかかろうとしたその時。

「麻美！」

船長がトライデントを取出し乗組員を助ける。
だが、デットゴーレムは2体。そのもう1体のデットゴーレムは後
ろから船長に向かってパンチを放とうとしている。

「させるか、バーディア！」

バーディアを喚んで、船長への攻撃を防ぐ。うし、ギリギリだ。

「バーディア、相手はのろまの代わりに防御・攻撃がかなりある。
気を付ける」

「……………（コクン）」

デットゴーレムの攻撃を軽々避けるバーディア。さすがスピードを
特化したモンスターだ。

「GOOOOOO!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「っ!?!」

み、耳が……………こ、デットゴーレムコイツの咆哮のせいか……………っ。

「……………欲しい」

俺はその時、ワクワクでどうしようもなかった。だって、こんなヤ
ツを仲間にしたら絶対に祥悟を倒せるんだからな。

「なあ、名前…教えてくれ」

「え？」

「これからコイツらを倒す。そのためには仲間の名前を知る必要がある。違うか？」

「……………」

劔飛SIDE OUT

ロンスIDE

たく、劔飛のヤツどこにいったんだ？ 先に走っていったとたんに急に姿を現さなくなっちゃまって…

「プレイボール…」

「っ！？」

弾丸が飛んできた…？ しかも、物凄い速さで…

「っ！誰だ？」

ギリギリで避けた。あ、危ねえ…

「……………」

現われたのは女性。

何で女性がこんな危なっかしいところに…？

「あまり動かないで、狙いが定まらない」

「んのやろっ」

久々の強者だ。何が目的かは知らんが、俺の前に現われたのが運が悪いつてことを教えてやる。

「たああっ!!」

横に大振りをするが、フツと下を見たら女性が待ち構えていた。チツ、躲すには距離が足らねえ。どうする…??

「これでゲームセット…」

どうする! 否っ。

「跳ね返す!」

「え?」

女性が放った弾丸を見事跳ね返した。

……久々だ。こんなに燃えるのはっ!

「なあ、名前聞いてもいいか?」

「……?」

「俺の流儀はまず名前を聞いてから倒すんだ。っと、俺の名前は口ン・ハワード。よろしくな」

「瑠璃……水原瑠璃」

「そうかい。なら、遠慮なく行くよ！」

瑠璃が2丁のハンドガンをガンガンと放つ。だが、俺の大剣にやかなうはずない！

「せえええええやあああ！！！！！」

キング・リューザを上手く使って瑠璃のハンドガンから放たれる弾丸を避けるが……

「ぐあっ！」

な、何でだ？ 確かに弾丸を避けたはずだが…

「瑠璃の弾丸は自分の思い通りに動かすことが出来る」

思い通りに、ねえ。

やるじゃん。俺もますます燃えてきたぜ！ 絶対え倒す！
そう思い瑠璃に斬り掛かるが

「遅い……」

「ガハッ！」

くっ…前衛と後衛じゃ差がありすぎるっ！ どうすれば…

「瑠璃に勝てるはずない」

ハッ、言ってくれるじゃん。んなこと言われちゃ本気を出さなきゃいけないようだな。

見せてやるよ。俺の本気をつ！

「リミット解除“レベル3”」

バラバラになった仲間 劔飛&ロンSIDE (後書き)

さてさて、ひょんなことからバラバラになった仲間たち。一体どうなるのか…？

仲間と咲彩の秘密

「リミット解除“レベル3”」

そういうとロンは大剣を置いて、詠唱を唱え始める。すると、ロンの武器『キング・リユーズ』が変化し始めた。その変化した大剣はかなりごつくなっていて、切れ味も良さそうである。

「……瑠璃に勝てるはずない」

「そりゃやってみないとわからないもんだ、ぜ！」

ロンが一振りをする、大地が割れ始める。地割れだ。大地を揺るがしといて、相手の隙を突く。

だが、それを読んでいたのか、瑠璃は石の上に移動する。

「暗殺は素早さが大事」

「でもよう、逃げてちゃ殺せねえぜ」

「……っ！」

気が付いたらすぐ後ろにいるロン。そしてロンは大剣を振り上げ……

「ぬおおおおっっ！……！！！」

瑠璃が「もうダメだ」と思ったとき、自分の体に斬られた感覚がないのに気が付く。なぜならロンは大剣を寸止めをしていたからだ。

瑠璃の頭にはハテナがあるみたいに呆然としている。それはそうだ。自分を殺そうとしているヤツを殺さないなんておかしい。だが、ロンは違う。殺さないんじゃなくて殺せないのだ。優しい心の持ち主のロンは殺すなんて到底無理。

「瑠璃が生きていればあなたを殺すかもしれない」

「なら俺は殺されないように生きる」

「瑠璃が死ねばあなたは幸せになれる」

「人が死んで幸せになれる人はいない」

暫し2人は黙り込んで10分が経過をしようとしていた。最初に声を上げたのは瑠璃だ。瑠璃が言った言葉は意外な言葉であった。

「瑠璃も……」

「？」

「瑠璃も生きていいの？」

「当たり前だろ？誰も拒まないさ」

「瑠璃も、ロンと一緒に生きたい。瑠璃を救ってくれた命の恩人と一緒に……」

「来いよ。俺らと一緒に来たら絶対エ面白エぞ」

「うん」

そして劔飛と綾子は…

「行つたよ劔飛君！」

「了解です、綾子さん」

デットゴーレムと死闘し続ける事早1時間。綾子と劔飛はデットゴーレムを追い詰めるようになった。

「バーディア、アイツの足下に向かってブレイクファイアッ！！！！！！」

炎の不死鳥になったバーディアはデットゴーレムの足へと飛んでいく。

それも素早い動きで。

それに追い付けないデットゴーレムは、よろけて転ぶ。それを見逃さない綾子はすかさずトライデントで攻撃。

「今よ！」

「おしっ！」

綾子の合図で劔飛は詠唱を唱え始める。

そしてデットゴーレムは魔法陣の中に吸い込まれる。成功だ。

「はあ、はあ………」

「お疲れ様」

「お疲れ様です。綾子さん」

ハイタッチをしてその場を去る2人。

場所は移って洞窟の地下。そこには1人の男性と女性が睨み合っている。

「そこを退いて貰えるかしら？」

「断る。俺はお前を倒す」

「何で私なのよ！」

「それはお前がここにいるからだ」

男性は咲彩に近づきそう言う。

「は、はぁ？何言ってる」

咲彩が言い返そうとしたら男は斧を振り下ろす。

間一髪で避けた咲彩はアイシクルで男を斬り裂く、が。斬った感覚がない。フツと上を見ると男が斧を構えてニタ、と笑う。

「っ！」

急いで防ごうとする咲彩。防いだはいいが、男の一撃がスゴく重い。

「お、重い……」

「ハッ！」

さらに力を入れるとまた重くなる。

それに耐えきれなくなった咲彩は左に回避して攻撃を流す。

「やるじゃん」

「ありがと。でも私、急いでいるからアンタの相手をしてるヒマはないの」

「言っただろう？お前にはなくても俺にはある」

「……そう、なら仕方ないわね」

お互い再び武器を構えまたジリジリと睨み合う。
最初に動いたのは咲彩だ。

「ハアッ！セイツ！」

斬り上げ、落ちてきたところを横に溜め斬り。

「ぐうっ……！」

男の武器 断頭斧でなんとか防ぐ。

「……アンタ、名前は？」

「俺ア尋^{あかねじこ}。赤根尋^{あかねじこ}つてんだ。お前は？」

「私は星菜咲彩」

「そうか。まあ、どうでもいい。とりあえずお前をぶっ飛ばす！」
そして場所は変わって洞窟出口付近。ここも男と男が火花を散らしている。

「てやああああっつ！……！！！」

「はああっ！……！！！」

ハンマーと槍がぶつかり、金属音が洞窟内を響かせる。

ハンマーと槍…素早いのは槍の方だ。だが、攻撃・防御とくればハンマーの方が有利。

「……………」

無言で槍を突きまくる男とそれをハンマーで必死に防ぐ錬斗。

「くっ、速エ…まるで矛先が見えねえ」

「トドメ！」

最後の渾身の突き。結果は……

「あっぶねえ……」

ハンマーで防ぎ、何とか身を守った錬斗。

その後錬斗は男との勝負に勝って、ある事言っ。

「俺の名前は吾神錬斗。お前は？」

「名前なんて聞いて」

「俺とお前は戦った。そして友達になった」

「ち、ちよっ！どついう理屈だ！」

錬斗はなぜこのようなことを言ったのか。

それは錬斗の頭の中では『ケンカ＝友達』という風になっているからだ。

錬斗はバトルワールドに来る前はケンカ好きの不良なので、この考えが正しいと思っている。

「たく〜、友達って言われても何すりゃ…」

「俺らの仲間になる。ただそれだけだ」

「友達…」

ニコリと笑う錬斗に対して男は少し間をあけてから「おう」と二言で返した。

そして場所は戻って咲彩と尋。

数分間2人は激しい防功をしている。攻めたり防いだりの繰り返しだ。

「はあ…はあ…アンタ、そろそろくたばれば？」

「冗談。諦めるのはお前だ」

「嫌よ。私は…アンタを倒して…劔飛と…」

「ふん、スパイのくせに何を」

「っ!?!? 何でそれを知ってるのよ!」

暴走

「何で……私の目的を……？」

「バレバレだつつうの。単にアイツらが鈍感なだけだ」

そんな……私の計画が……

…殺す。あの男を殺してやる!!!!!!!!!!

「お前の狙いは天月劔飛の首を刎ねること。違うか？」

「……いいわ。アンタを殺してこれをなかったことにする」

「やれるもんならやってみろ。俺はそう簡単にいかない」

「はあああああ……!!」

「うおおおお……!!」

ガキンと金属音が響き、交戦が始まる。

こいつは殺して……

殺して……

そして……

劔飛を殺す！

「いい殺気だ。だが、まだまだ」

高くジャンプして斧を振り上げる。よし、避けれるスピードだ。

「そこっ！」

「がっ」

い、いつの間に後ろに……？

確かに相手は上に居たはず。なのに何で後ろに……
フ、フフフッ……

「アハハハハハ」

「ようやく本性を現わしやがったな」

「いいワ、あなたも殺して劔飛も殺ス」

咲彩SIDE OUT

尋SIDE

な、何だこの悪寒は…！ とてつもなく邪悪なオーラだ。先ほどの殺気より凄まじい。

しかも身体から赤い線がいくつも入ってる。これは覚醒か？ いや、それにしても身体に変化しすぎている。これは暴走だ。

早くなんとかしないとコイツは……

そう思っていると、後ろから熱気を漂わせているのに気が付く。その正体とは……

「バーディア、あまり大きすぎると咲彩にも被害が加わる。少し抑えて」

「クキュー」

天月劔飛……何でこんなところに…？

「話は後だ。今は咲彩の暴走を止めるのが優先だ」

「お、おう」

そうだ。今はコイツの暴走を止めるのが最優先だ。とやかく考える暇はない。つつても、コイツが欲しいのは天月劔飛の首。天月劔飛を危険に曝すのはあまりにもひどい話だ。

「ま、先にコイツの暴走を止めないと話が進まないな。ハッ！」

断頭斧で真上から切り裂く、が。星菜咲彩は自分の大剣で防ぐ。なるほど、一筋縄じゃないか。それに、少しだがパワーも下がり始めている。いけるかもしれないな。

「劔飛君っ！」

「綾子さん!？」

そう名前を呼ぶものは海賊服を着た女性。その女性はトライデントを持っていて、なぜか俺を見ている。うーむ、彼女に何かしたかな？ 記憶に無い。

まあ、考えるのは後にしよう。それより……

「ウウツ……」

まだ治まらないとなると、手段は1つしかない。星菜咲彩を倒す。それを天月劔飛達にも伝えるが、「仲間だから倒せねえ」と言つてこの方法を拒否した。ま、そりゃそうか、天月劔飛と星菜咲彩はパートナー。仲間を失いたくない気持ちも分かる、が。今のアイツは何を言つてもどうしようもない。助かる方法はあるが、確率的に低い。どうする……？

「どうするもなにも、俺は咲彩を助けだす」

「無理だ! 助かる方法はあるが、確立が低すぎる!」

「でも、あるんだろ?」

「……」

言うべきか? いや、言わなくちゃならないな。

「それは」

言い掛けたとき、星菜咲彩の大劔が目の前に来る。チツ。

「な、なんだとっ!?!」

全く、バカというか何というか。ま、多分そんなバカだからこそ惹かれたんだろう。

「さて、反撃をしないとな」

断頭斧『パニツシャー』を地面に置いてある詠唱を唱える。一応初心者用の詠唱覚えてよかったよ。

「何してんの?」

「睡眠魔法の詠唱だ。コイツを一時的に眠らせて夢のなかへ突入する」

「そ、そんなこともできるの?」

「ああ、だが、眠らす時間は少ないがな」

「でも、もし誰かがあの娘の夢のなかにならどうなるの?」

「死ぬな」

「そんな……」

「その時が来たらまた眠らせる」

そう、なかに入るのは2人。つまり天月劔飛とあの女だ。

「私も残るよ」

「な、何言ってるんだ！」

「あなたは魔法に集中して」

なかに入るのは天月劔飛だけ……って言うことか。

「天月劔飛！ 聞いてたか？」

「もちろん！」

「よし、展開するぞ！」

天月劔飛……頼むぞ。

暴走（後書き）

さてさて、今日は覚醒と暴走について説明していききたいと思います。

暴走……覚醒を一定以上到達すると暴走する。

止める方法は倒すか眠らせ夢のなかへ行って魔夢を倒す。

覚醒……成功すると全ての能力が上がるが、失敗すると上記のようになる。

サーヤの過去（前書き）

今回は謎だらけの咲彩の過去です。

サーヤの過去

さて、咲彩の夢の中に入ったんだが……なんかスゴいことになってるな。一言で表すなら少しファンタジックだ。俺の予想とは違う。そして俺は無数のドアがあることに気が付く。この扉って一体……

『こりゃあ星菜咲彩の記憶だな』

突然頭に流れる声。しかも聞き覚えがある。つーか、咲彩の記憶って……

『言葉どおりだ。だが、あまり探索してやんな。プライベートっつうのがあるからな』

「あ、ああ」

少し歩くと『オーディション』と書かれたドアがある。どういう意味だ？

心臓がバクバクする中ドアを開く。刹那、光が俺を包み込み、ある記憶を映し出す。それは幼い頃の咲彩であった。何が何だかわからないが、見てみることにした。

『うう〜……緊張するよお〜……』

『大丈夫、咲彩なら出来るわ』

『うん！』

どうやら何かのオーディション会場らしい。そして咲彩を慰めてい

るのは母親か？ 何か優しそうな母親だな。ん？ あそこにいるのは母さん？ 何でこんなところに………待てよ？ 小さい頃のうちの母さんはどこかに出かけてくるって言って確か……

『杏』

『昌子！ 来てくれたのね？』

昌子とは俺の母親、そして杏とは恐らく咲彩の母親のことだろう。でも、母さんの様子が変だ。何か暗いような……

『杏………』

『んー？』

『死んで』

『えっ？』

ぐさりと生々しい音が聞こえる。ちよっ………母さん何して

……あの時か………母さんが突然いなくなったのは………

母さんは咲彩の母親を殺し逃走。なんつう親だ。いや、そうじゃないな。咲彩はさぞかし俺を恨んでいるだろう。

「俺は母さんの代わりに罪を償う。それが最善」

『バカ考えてるんじゃない！ お前が死んだところであいつは救われない』

「じゃあ……俺にどうしろと？」

『…………』

「あいつは俺に恨んでる。なら、あいつが望むことをしてやるのが」

『お前、何であいつがお前の仲間になったか知ってるか？』

仲間…………どうせ俺を殺そうとしたんだろう。だから俺に近づくようにと…………

『昔はな。だが、今の彼女の考えは違う』

「それはどんな風に？」

「さあな」

そうか、あまり気にしすぎないって事が。

俺はとりあえず進むことにした。

少し歩くと光が見える。やっと出口か。何かスゴいものを見ちゃったから気が進まない。

「あらあら？」

後ろを見るとお嬢様っぽい格好をした女の子が俺に近づいてくる。何だ？ 彼女の後ろに黒いものが…………

「何モンだ！」

ここに入れる者は俺しかないはず……なぜ見知らぬコイツがっ！

「私は宇鍊うねり 刀香トウカ。ただただ強者を求める者ですわ」

ま、マズイっ！ この殺気は只者じゃない！ 足が……震え……て

……

「ザコには用はありませんわ」

スツと俺の前を通り過ぎる。び、びびった……

でも、何だったんだろ。ザコには用はないって言ってたけど、何かあるのか？ いや、あまり深く考えないほうがいいな。それに、戻ったら咲彩に何て言うか……

『天月劔飛、そろそろ戻ったほうがいい』

「え？ でも、咲彩の中の魔夢を倒さなきゃいけないんだろ？」

『もう解決した。早く帰ってこい』

「あ、ああ」

意識を無にする。すると、目を開けるとそれは見に覚えがある場所。良かった、元の場所に戻って。

「あ、そうだ。咲彩は!？」

「まだ寝てるわよ」

「そっか……」

良かった。

しかし、いきなり解決したって……やっぱりあの宇鍊ってヤツが関係しているのかも。あの殺気は尋常じゃない。またいずれ俺らの前に来だろ。それまでには力をもっと付けなくちゃな。

「頑張れ、劔飛君！」

「ちょっと、頭をクシャクシャするのやめてください！」

「むう、何よもう」

今現在ここにいるのは俺と咲彩、ロンと鍊斗さんはどこにいるんだ？ 早く見つけださないと先に進まねえ。

「お、いたいた」

「やっと劔飛達に会えた」

その声は……鍊斗さん！ ロン！……達の後ろにいるのは誰だ？

「……誰？」

「俺の仲間、天月劔飛と星菜咲彩。時に劔飛」

「ん？」

「そのお美しい女性は誰だ！」

「ロン……こっちに来て、ちょっとお話が……」

「あつ、ちよつ、あー！ー！ー！！！！！」

あ、どっか行つた。まあ、じきに戻ってくるだろ。生きていれば……

「何だ何だ、結構賑やかになつてるじゃねえか」

「あまりうるさいのは好きじゃない」

「ま、そうカツカするなや」

錬斗さんともう1人のがこちらにくる。誰だ？　なんかスゲー仲良さそうな感じがするけど。

1時間後、ロンは無事に帰ってきた。良かった、死んでなかった。あの女性からの視線は、死を招きそうな感じがしたから心配した。

「さて、みんな戻ってきたから自己紹介をしようか」

1人の男。そういや名前知らなかったな。

「俺の名前は赤根あかね 尋ヒロ。死刑執行人だ」

「水原みずはら 瑠璃ルリ……暗殺者アサシンと射撃手スナイパー」

「私は志木しぎ 綾子アヤコよ。職業は海賊バイレーツ。よろしく！」

「伊達だて 魁吏カイリ、槍兵ランサーだ」

それぞれ自己紹介をし、俺らもする。そして早速ある話をする。そ

れは綾子さん達が仲間になるのか。

綾子さんは仲間になるとか言ってたけど、他の人はどうなるんだ？

もし、仲間になってくれるならどんなに心強いことか。

「瑠璃はいつでもロンと一緒に」

「おいコラ！ 離れろ！」

仲が良いものだ。

「私も劔飛君が心配だし」

そう言っつて俺の頭をクシャクシャする。ホントに俺の頭好きなんだよね。綾子さん。つーか、俺が心配つてアンタは俺の母親か！ 24歳でしょ！

「俺なら仲間になる」

「俺もだ」

お、まさかこの2人が仲間になってくれるなんて。こんなにも心強いことはない。

「あ、そうそう劔飛君。この先は船を出す必要があるんだけど……私たちの船使う？」

「え？ でもそれってミズナ村に着かないんじゃない……」

咲彩の言うとおり、ミズナ村はこの洞窟を抜けて少し歩いたら着く。そう聞いた。いや、そうじゃなかったらこの地図は一体何のために

あるのか。

「んー、じゃあその地図がもし、足止め用だったら？」

その言葉に皆は固まる。そうだとしてみなで？ なぜそんなことを？ まるでここから出ないようにしていきりたいだ。

「とりあえず私たちの船に移動よ。話はそれから」

こうして俺らは4人も仲間にした。これからどうなっていくやら。

サーヤの過去（後書き）

何か質問や感想が書いてください。

呪いと魔導士と錬金術師

綾子さんの船に乗ってから10時間。やっと、ミズナ村が見えてきた。結構長い道程だったな。でも、ここがゴールじゃない。

「ねえ、劔飛」

咲彩に呼ばれ、船のデッキへ出る。用はやっぱりあの過去のことか？ いや、咲彩は俺があの過去を見ていたの知らない。なら何の話？

「アンタさ、私の過去見たでしょ」

ビンゴ！ じゃなくて、何故そのことを知っているんだ。誰かが話したのか。

「尋から聞いたわ。私を助けるために私の過去を見た。そして、私はアンタを」

「ストップ」

咲彩の表情が暗い。俺は本来見てはいけないものを見てしまっている。まず俺から謝るのが道理だ。

「すまない！」

俺の謝りに目がキョトンとする咲彩。どんなに思っついていようと知ったこっちゃない。今の俺には謝ることしかない。それが今俺の一番の出来ることだ。

「え？　ちよつ、何で劔飛が謝ってんのよ！　謝るのはまず私からよ」

そう言つて頭を下げる。

「ごめんなさい。私が寝ている間、夢の中でお母さんに会つたの。それでね、お母さんがこう言つたの『私は悔やんではないわ、だから劔飛君に復讐するのは止めなさい』。それで分かつたのは、復讐は復讐を生むだけ、何も解決してはいない。そう思うと、何だか自分がやっていることがバカらしくて……」

咲彩……

「でも、これでスッキリした。ありがとね」

その時の咲彩は涙ぐんでいた。俺の母親が咲彩の母親を殺した事には変わりない。せめて何か償わせてもらわないと俺の気が進まない。咲彩に頼んでみると、意外な台詞が返ってくる。

「ずっと……私の傍にいなさい」

少し恥じらいながら言う咲彩に不覚にもドキツとしてしまう。

「咲彩……」

ずっと……咲彩は1人ぼつちだったんだ。

そして俺も1人ぼつち。

多分、俺らは誰かに甘えたりしたかった。なら、俺が居よう。そうすれば咲彩も俺も1人じゃなくなるし。

「分かった。ずっと一緒にいる」

どこまでも、な。

「着いたわよ。ここがミズナ村」

船のイカリを降ろし、ミズナ村に入ろうとした瞬間。何者かが仁王立ちをしている。コイツは一体……

「ここは神聖なる場所。ここに入るとは許さん！」

槍も持っているし、ここを守るものかな。槍には遠距離だ。

「バーディ」

「俺がやる」

俺がバーディアを喚ぶ前に魁吏が一步前へ出る。そうか、やっぱり槍使いには槍使いのスゴさがあるのか。

「じゃ、俺が立会人になろう」

鍊斗さんが手を挙げる。俺らが見届け人ってことか。

「両者前へ………始め！」

最初に動いたのは魁吏だ。

魁吏は槍の矛先を上に向け構える。

「仙竜……」

静かに前かがみの態勢にする。

「疾晃！」

そして、風のごとくに相手に刺す。しかし、相手は高くジャンプして躲す。それは俺に見えないくらいに素早く。

「そんな……俺の攻撃が躲されるなんて……」

「蒸真深裂！」

上から下へと突く。敵ながらあっぱれだが、魁吏はその上のスピードを上回る。

「心臓必中。爆閻針！！！」

出た！ 魁吏の能力 心臓必中。その能力を使ったら必ず心臓を貫ける。1日2回つてのは玉に瑕だが、これに勝るものはいない。

「やつ……べえ……」

運良くも相手は空中。空中では身動きはとれないはずだ。

「うおおおお……！！！」

相手の槍は弾かれて、その相手は……

「はあ……はあ……」

ギリギリ避けたみたいだ。

「勝者、伊達魁吏」

相手は動けない状態。よってこの勝負は魁吏の勝ちで。

「すみマセンでしたあー！」

ここは海賊や盗賊に襲われる事が多いので、勘違いのようだ。しかも土下座って、公共の場でよく恥ずかしくないよな。

「それより」

「あ、名前は時原ときはら 成ナルツス！」

名前じゃねえよ。と、みんな心の中で思っているはず。

「名前じゃなくて、ここについて教えてほしいんだけど」

魁吏に言われ、渋々話す。

「さっきも言いましたけど、ここは海賊・盗賊に狙われやすい場所です。何故狙われるようになったのかは、少し意味不明なんス。『8000年前にある呪いを仕掛けた。その呪いを解きたければ錬金術師を呼んで解け』と言い伝えではこうなってます」

「錬金術師？ 何で錬金術師？」

成の説明に鍊斗さんが反応する。そりゃそうだろう、鍊金術師なんてそこら辺にいるだろうし、大体呪いを解くのに何で鍊金術師……そうか、だからか。

「なあ、何か分かったのか？」

尋の問いに俺は説明するように答える。

「鍊金術師……つまり、呪いを掻き消すための武器を作ったことだ」

「なら、魔導士と協力すれば？」

「綾子さん、俺らのパーティに魔導士はいないよ。確かに、魔導士と協力すればより最強の武器を作れるかもしれないが、運悪くこのパーティには魔法系統がない」

「んで、どうするんだ？ 鍊斗だけじゃキツいんだろ？ なら探しゃいいじゃん」

「ロン、簡単に言うがこの世界は広い。ましてや魔法系統と言う範囲は小さすぎる」

鍊斗さんの言うとおり、俺はこの世界に来たばかりだが、長年この世界にいる鍊斗さんの意見を尊重したほうが得策かもしれない。でも、このままにしてはられないし……

「皆さん、何してるんですか？」

ピヨコンと小さい顔を出す。誰？

呪いと魔導士と錬金術師（後書き）

さてさて始まりました新章 ミズナ村の呪い編

彼女は一体誰なのか……？

白い霧

どうみても小学生じゃん！　ロリじゃん！　いや、別にロリを否定したわけじゃないよ！　ただ……

「何で18のくせに身長が小学生の平均しかないの！」

色々ツツコミたいけど、俺の体力が減るから止めよう。

「それより、コイツが本当に魔導士なのか？　何か信じがたいな」

それは俺も思う。まず詠唱が唱えられるかつてのが次の疑問。噛んだりしないだろうか？　何て考えが何度も何度も頭を往復する。てか、それしか考えられん。

少女……いや、彼女は今にも泣きそうな顔で俺らを睨んでいる。心配すぎる。

「と、とりあえず村長に話をしようぜ」

ロンの言うとおり、俺らは呪いをのが最優先だ。

「皆さん、よくぞ来てくれました」

案内されたのは村長の家、ってか家デカイ。盗賊や海賊に襲われるのが納得だ。

「一体、何があったんですか？」

綾子さんが村長に聞く。すると、村長は黙ったままある方向に指を指す。その場所はこのミズナ村で一番高いと言う木、モール大樹。あの場所から呪いを放っているのか。

「行ってみる」

おおっ、ここに来て水原が初めて喋った。ホントに無口無表情だな。

「尋、ちよつと確かめたいことがあるんだけど」

「ん?」

魁吏が尋を呼んで、尋は魁吏の耳に口を当てる。内緒話だろうか？

「も、もしかして尋って魁吏のこと……」

それはない。

あの事件以来咲彩は結構ジョーダンを言うようになった。ツッコミ役が俺だけになったのは悲しいけど、咲彩が笑顔を取り戻せたからよしとしよう。

歩いてから約50分、何やら白い霧が出てきた。こりゃ前が見えないな。皆とはぐれる前に戻ったほうが良さそうだ。

「皆、一旦引き返」

後ろを振り向くと皆がいない。くっ、遅かったか。

「劔飛！」

俺を呼ぶ声がした。その声の正体は咲彩だ。良かった、とはいえない。その良かったは皆と合流して初めて言える言葉だ。咲彩だけ見つかったても安心は出来ない。

「劔飛、何か近づいてくるよ」

耳を傾けて良く耳を澄ます。ザツ、ザツ、と俺らの方に近づくのが分かる。

人だ、人がこちらに向かってくる。やべえ、何だこの殺気は……っ！ 大地が震えている。

いや、殺気じゃない、魔力だ。強大な魔力がこっちに来る。

「来るわよ、劔飛」

「ああ」

咲彩はアイシクルを抜き、俺はデットゴーレムを召喚する。

「咲彩、お前は必ず俺が守る」

「全く、劔飛のくせに生意気言っちゃって……私はアンタの背中を守る。アンタは私の背中を守る。いいわね？」

「問題ない！」

劔飛 SIDE OUT

ON SIDE

……「ここはどこだ？ 劔飛達の姿が見えない。はぐれたか。

「瑠璃たち……迷子になった」

「だよな……っつおっ?!」

い、いつの間に瑠璃が……

気配を消して俺の後ろに立たないでくれよ。心臓に悪い。

「っ！ 敵……」

こんな時に限って敵が出てくるんだよなあ。こういうのはフラグって言うのか？

「敵を抹殺。それが俺の使命」

後ろ!?

「っつ」

ギリギリで矢を見切り、キングでガード。間一髪、しかも矢の先に毒が盛られていた。危ない、なぜこんなことをするのか……

「誰だか知らないが、俺を怒らすたあいい度胸だな」

「瑠璃のロンに……触らないで……っ！」

すかさずハンドガンで射撃。瑠璃の愛用のコルト・ガバメントか。弾丸の速度が速いと聞く。

「そんなものか。究極アルティメット・スナイパーの狙撃手」

！？ 瑠璃の攻撃が……当たらない……？

「俺の名前は獄条じくじょう 槇マキ、お前を倒しに来た。水原瑠璃！」

どういうことだ？ このいかついヤツと瑠璃が……知り合い……？

ROUND SIDE OUT

錬斗SIDE

「おい。劔飛つるぎ、咲彩さき、ローン」

どこ行っただよアイツら。他のヤツらもないし、しかも……

「何で俺がガキと探さなきゃならんだ！」

「むう、ガキではないです！ 陽花です！」

散々だよ全く。ん？ 何かの視線感じるな。何だろ、とても邪悪な感じの……

「誰だか知らねえが、姿を現せ」

「おや？ お気付きでしたか？」

俺の影から出てきたのは1人の女性。コイツ、いつから俺の影にっ

！もしかして、最初から……？

「気付かないのも無理はありませんわ。わたくしに気付くものは、あの4人ですもの」

4人？　どういう意味だ？　全く訳が分からない。

「もしかして、天月君やハワード君達のところにもいるですか！？」

「お子様なのによく分かりましたわね」

「陽花はお子様じゃないですー！」

そう言うと、右手に何やらペンみたいのを取り出した。

「陽花は魔導士でも、書いたものを具現化出来るのです！」

ええ！？　ズルツ！　そして無い胸で張るな！

でも、これなら呪いを解くことが出来るかもしれない。

「行くですよー、行け、幻獣　ユルルングル」

うおおー、デカイ。何だコイツは……

「罪人を飲み込む虹蛇。ユルルングルです」

何か頼もしいな。

「行けーですー！」

ガブツとユルルングルが女性を食らい付く。だが、ユルルングルの腹からどンドン削れていく。まさかコイツ……

「そんなもんですの?」

効いてない……嘘だろ……

「そ、そんな……あ……」

錬斗SIDE OUT

尋SIDE

「ハア、ハア」

コイツ、何で攻撃をしても効かないんだ。

「ガーディアン守護者。これが俺様の職業だ」

なるほど、防御が取り柄の職業か。
おもしろい。

「ちよつ、尋君何笑って……」

「さあ！ 勝負だ!」

綾子さんが何か言っているが気にしない。俺はコイツをぶん殴る。

「ほう、俺様に楯突くたあいい根性してるじゃねえか」

倒す。俺たちに手を出すと痛い目に逢うってことを教えてやる。

「来い！」

「……おおお……」

尋SIDE OUT

白い霧（後書き）

これで2回目ですよ、皆がバラバラになるネタ。

でもこれで仲間になるってのはありえませんが、はい。

では、ご感想待ってます。

槍使いの友情（前書き）

今回は前回出しそびれたあの2人。

槍使いの友情

「いってえ……ここどこだよ」

確か俺は皆さんと一緒に歩いて……そんなもって落し穴みたいのに落ちて……

「あつ、魁吏さん！ 起きてください！」

「ん……ん……ここは……？」

「どうやら罠に嵌められたっぽいです」

でもここってどこだ？ 下に落ちたのは分かっているが、こんな場所……

「ん、な、んかおかしいんだよねえ」

魁吏さんが悩んでる。おかしい？ 俺にはイマイチ状況が読めない。

「だっておかしくない？ 何でわざわざ俺と成ツチだけ下に落とされたのか。もし、俺の予想が正しければ、俺らはアイツらの中で弱いつて扱いになっている」

俺らが弱い、か。そんなことない！ 俺はともかく、魁吏さんはものすごく強い人だ。許せない、やっと俺の尊敬する人を見つけたのにつ！

「探しましょう。魁吏さん」

「探すって言ったって……今の俺らはここを動かないほうがいい。あまりへたに動くとも面倒なことになりかねない。劔飛達が見つけるまで待とう」

「魁吏さんは……黙って見てるって言うんですか？」

「そうじゃない。ここがもし敵のアジト内だったら騒ぎになる。そうなったら劔飛達も来に来れなくなる。分かるか？ その意味」

そんな……俺は……

「敵を倒す！」

「ちよつ、待て！」

魁吏さんが何か言ってる。今の俺は全く聞こえないだろう。怒りで……失望で……俺は無意識に奥の方へ進んでいった。

魁吏さんは分かってない。俺がどれだけ魁吏さんや皆さんのことを考えて

「くそっ！」

八つ当たりで壁を殴る、殴る、殴る。何回も壁を殴った。戻ろうかな、そう思ったときに何か氣弾のようなものが飛んでくるのに気が付く。

「誰だ！」

「侵入者発見、直ちに排除せよ」

ロボット？ なぜこんなところに……？

「排除せよ！」

「うおっ」

み、ミサイル？ おいおい、どこの秘密兵器だよ。てか、学校で非核三原則って言うのを習わなかったのか？ って言う俺も槍を持ってるんだけどね。

「避けなかったら……危ないだろ……！」

槍で貫く！

「ビビッ、ビ……排……除……」

「どうだ！ これでお前の負け」

「排除！」

なっ、もう1体……？ いや、コイツだけじゃない。後ろに何十体かいる。

「くっそおおおっ……！！！」

大群の中に無理矢理突っ込む。突いて、突いて、突いて、突いて。そしてぶち貫く！

「たあああああ！……！！！」

何体倒しただろう。結構倒したのは分かるがなかなか減らない。き、キリがない！

ハア、ハア、ミスったなあ。これで俺の人生が終わりか。もう、体が動かない。くっそ……

そのまま俺は目を閉じた。

フワフワする。ここは一体……

それに、何か暖かい……スゲエ気持ちいい……

そっか、俺は天国に来たんだ。

「ん、ん……」

「気が付いたか」

「あれ？ 魁吏さん？」

俺は魁吏さんにおぶさっている。

確か俺は天国に……でも何で魁吏さんがいるんだ？

「あまり無茶すんなよ。あの大群を1人で倒すの大変だったんだぞ？」

俺はなんて奴なんだ。勝手に1人で動き、そして魁吏さんに迷惑させているなんて……

「すみません、俺」

「何も言つな。俺もお前の意見を聞けばよかつたって今も思っている」

「魁吏さん……」

「さ、まずはここを出るぞ」

「はい！」

成SIDE OUT

劔飛SIDE

「我は暗黒の槍使いなり、会心の一撃受けてみよ！」

黒い槍？ なんて邪悪なオーラを纏っているんだ。

「燃えろ」

「キャアアアア！！！！」

黒い炎が咲彩に向かう。マズい、防御が間に合わない！

「咲彩！」

コイツ強え、今まで戦ってきた中でかなりの実力だ。世の中にはんなバケモンみたいな奴が一杯いるのかよ。

「どうした裏切り者。貴様の怨みは簡単に消えてしまったのか？」

……え？ 裏切り者？ どういうことだ？

「咲彩、どういっつもりだよ」

「あの男の言うとおりよ。私はあの男の配下だった。そして、あなたを倒そうとした。それは紛れもない事実よ」

咲彩が俺を殺そうとしているのは知っている。でも、コイツの下にいたなんて……

「でもね、私は誓ったの。聖騎士として……パラディン1人の女として劔飛を守って！ だからあなたの下にはもうならない。あなたを倒す！」

「いい度胸だ。来い」

クイクイと人差し指で挑発をする。

咲彩が戦っているのにどうして俺は後ろで指を食わえジツと見ている！俺が弱いからか？ そうだ。弱いから皆に迷惑を掛けてしま

う。

「俺は弱い」

劔飛SIDE OUT

魁吏SIDE

ん、ここはどこだ？ どうやら俺らは迷い込んだみたいだ。

あ、上から落ちてきたから上に上ればいいのか。でもどっから上るのかな。

「魁吏さん、あそこに蔦がありますよ！ 上れます！」

案外早く解決した。こういうのは謎解き！ ってな感じで解いていくのが楽しいんじゃないか。

「魁吏さん、これ、いつまで上るんでしょうね？」

「さあ？」

確かに、上っても上っても地上には着かない。もしかしたら一気にモール大樹の一番上に到着か？ それならどんなにいいことか。なんて考えてたら光が見えた。もしかすると……

「何だよ……ここ……」

そう、モール大樹に着いたが、大樹の中がスゴいことになっていた。それは中が近代の機械化になっていたのだ。確かモール大樹って、古代からあるモノって村長が話していた。

「魁吏さん、どう思います？」

「どっつて……止めるしかないだろう」

「ですよー」

考える、必死に考えるんだ。

「成、下に降りて劔飛達に報告するぞ」

「了解ッス」

槍使いの友情（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
クライマックスに見えますがクライマックスではありません。まだ
まだ続きます。

信じる力

力が欲しい、だけど俺には無理だ。召喚師だからだ。皆の補助が好きだから……皆の役に立ちたいから召喚師を選んだ。でもそれはただの勘違い。ホントの召喚師は皆の補助だけじゃなく、自分の力だけで乗り切るものなんだ。だから俺には無理だ。

「ぐあっ！！」

「劔飛！」

「諦めるのだ。貴様らには勝てぬ」

ちつきしょう……やっぱり無理か。

「私は……諦めない……」

傷だらけで立ち上がろうとする咲彩。無茶だ。俺らがこんな奴に適うはず……

「諦めない！ 何があるかと私は……諦めない！ そうでしょ？
劔飛」

咲彩が……咲彩が頑張ってたんだ。女の咲彩が頑張ってたんだ。男の俺が頑張らないでどうする。

「そうだな……一丁頑張りますかー！」

劔飛 SIDE OUT

ロンスIDE

「瑠璃、コイツと知り合いなのか？」

「……ただの敵」

ただの敵？ なら何でアイツは瑠璃に恨んで……？

「何だよ。コイツのこと全く知らないのか？ コイツはなあ」

「ッー！」

敵が喋る前に瑠璃は相手の顔面めがけて射撃。

おい、どういふことなんだ？ 俺にはさっぱり理解が出来ん。

「……そんなに言われたくないか？ 水原」

「な、何がだよ」

「ダメ！ 聞いちゃダメ！」

……瑠璃が声を荒げるなんて…… 一体何があったんだよ。

「クヒヒ、いい機会だ。これを期にお前の人生をズタボロにしてやるよ」

「止めてー！」

「コイツはなあ、この世界に来る前」

「いやあー！ー！！！！！」

銃を乱射。でも当たらない。瑠璃がハズレるなんて……いや、瑠璃が動揺してるんだ。

「鳩村総理を殺した張本人だ」

「なっ！？」

新聞で見たことある。確か、5年前に鳩村総理宅で鳩村総理の遺体を発見した、そういう記事だった。そして、犯人は逃走中であらう。つかってない。

「……瑠璃、ホントか？」

コクンと涙目で小さく頷く。そうか、あの事件の犯人は瑠璃……だったのか。

「クヒヒヒヒ、こりゃ傑作だ」

腹を抱えて笑う。でも、今はフツの女の子としてここにいる。

「でも、ここにいるのはフツの女の子の水原瑠璃だ」

「はあ？ バカじゃねえの？ てめえは騙されているんだよ」

騙されている、か。

「でもよ、昔は昔、今は今だ。俺は瑠璃を信じる」

そう、信じる。男が女を守るのはそうだ。だよな、“親父”。

「ロン……」

「ぐぬぬ……」

「さ、早く決めようぜ」

「うん」

「てめえらに何が出来る」

「バカはお前だ。お前は1人、俺らは2人。勝負はもう決まってる」

ごくりと唾を飲む。緊張だ。正直、この男に勝つ方法なんてあるか？ そんな疑問を抱いてしまう。でも、その疑問をすぐ消えてしまふ。その理由は瑠璃が俺の手を繋いでくれたのだ。そうだ。俺は1人じゃない。瑠璃が、劔飛がいる。

「……これは……？」

瑠璃が何かに気付いた。それは瑠璃と俺の武器だ。姿形が変わって、しかもそこから魔力が集中して集まっている。武器に魔力が集まるなんてありえるのか？ 否、現実起こっている。信じるしかない。

「……てめえ、何した」

「瑠璃とロンの愛の結晶」

愛の結晶って……でも、これでイケるかもしれない。今の俺らは誰にも負ける気がしない。そういや、名前決めてなかったな。この剣の名前は王の大剣だ。^{キングカリバー}その名も通り、王のようにドデカイ大剣。

「瑠璃の武器は……蒼い薔薇」^{ブルーローズ}

蒼い薔薇……フツ、いい名前だ。瑠璃は早速蒼い薔薇^{ブルーローズ}を使う。

「EM ストレート！」^{エボリューションミック}

真っ直ぐ伸びる弾。スゲー、俺も負けちゃいないな。

「パスワードショック！」

ザン、ザンと2回斬撃を放つ。敵はそれを受けとめ地面へ落とす。だがそれで背中が丸出した。このチャンスを逃すまいと、瑠璃はすかさず後ろに回り、ブルーローズで射撃。瑠璃のあの一言でこの戦いは終わった。

「ゲームセット」

「くっ……」

終わった。俺と瑠璃とあの男との戦いは終わったのだ。次は劔飛達を捜し出さなくちゃな。でも、一体どこに行けばいいんだ？

辺りを見回していると瑠璃が何かに気付く。それはさっきまでなかったデカイ木。恐らくモール大樹だろう。なぜ、とは考えない。大体予想はつく。あの男を倒したら突然大樹が現したと言うことは、

何らかの幻覚を見た、否、見せられていた。ってことは他の奴らも同じようなことになるだろう。尋も綾子も錬斗も陽花も、そして… 劔飛も咲彩も。今もみんな幻覚を見せられている。なら、こんなところで休んでいる暇はない。早く操っている主を探さなくちゃ。

「主を探そう」

「……うん」

ON SIDE OUT

錬斗SIDE

「どうしたんですの？ これで終わりとはいいいませんよね？」

俺の攻撃が当たらない……？ んなバカな、アイツの動きが早いとはいえ、擦りもしないなんて……対処法が見当たらない。必死で頭の回転を速めるが、結局見つからない。ここで俺らが負けるのかよ。アイツとの約束……果せねえじゃねえか。

「執筆魔法 散雷！」さんらい

筆に魔力を集中させて、空中に【雷】と言う字を無数に書く。パンと手を叩いたら、相手に雷が集中攻撃。うし！ これなら逃げられない、ナイスだ紫。

俺が内心で喜んでいるとシュンと何かが俺の頬を擦った。そんな…あの落雷を受けて平然としてる奴なんて……

「あらあら、静電気しずでんきのせいで髪が傷んでしまいましたわ」

こんなの……勝てるわけがねえ。

信じる力（後書き）

さてさて、今回は瑠璃の知られざる過去でした。

何か勝手に設定してしまいすみません）、）、（

でも、後悔はしていない！

強者の弱点(前書き)

こんばんは、グイスです。今回は錬斗&陽花 尋&綾子SIDEです。

強者の弱点

「なっ、何で何も効かないですか?!」

ああ、おかしすぎる。全ての攻撃が効かないなんて無理だろ。何か秘密があるのかもしれないな、ちよつと探ってみるか。

陽花にあることを教え、スツと低姿勢で構える。一か八かの掛けだ、これが外れたらもう次はない。

ロン程ではないが、力には自身がある。

「剛打錬羽しつだれんば!」

地面に叩きつけて地割れを起こす。

慣れた動きで陽花の後ろに移動。ここまでは俺の予想通り。後は陽花が指示通り動けば……

「そ、創造魔法 “人”ヒューマン × 2!」

陽花の魔法陣から2体のイケメン男性が現われる。そして相手の反応は……?

「!?!? こ、これは……も、萌えますわ」

ビンゴ! アイツは腐女子だ。男性×男性が弱点。

「ど、どうして弱点が分かったですか?」

「フツ、では、説明させていただこう。まず、相手のドレスを見ていただきたい。ヤツはBL系の缶バッチを付けている。よって、コイ

ツは男性×男性が一番の好物の腐女子だ！」

「……でも、小説だから分からない人もいます」

メタ発言は止そう、俺もそう思っていたから。ってツッコミや解説を入れていた場合じゃなかった、早く進まないと。

「……なぜか勝った気がしないです」

さて、オチビの戯言は無視して、霧が晴れたから大樹へ進もう。

「んお？ 何だお前らが先か」

先に大樹の中にいたのはロンと水原だ。ってことは、残りの劔飛、咲彩、綾子に尋と魁吏と成だけか。綾子と尋と魁吏と成はわかるが、劔飛と咲彩はいくらなんでも遅すぎる。何かあったに違いない。無事だといいが……

錬斗SIDE OUT

尋SIDE

俺の断頭斧を防ぐとは……コイツ、ただ者じゃないぞ。

「おいおい、まさかこれで終わりとか言わないよなあ？」

恐怖、ニヤリと微笑むアイツは悪魔が取り憑いたみたいな感じだ。

そして1つだけ疑問点がある。コイツ……本当に人間か？

「何だあ？ てめえらが来ないなら俺様から行かせてもらっぜ！！」

「ぐあっ！」

な、何もしてないのに傷が……っ！ どうなってるんだよ。

「ほう、意外と頑丈なんだな」

防御が硬い+攻撃が見えない。これじゃどうしようもない。

「何よあの硬さ、とてもじゃないけど太刀打ちが出来ない」

「俺様は最強の防御を持つ。お前らじゃ物足りねえ」

あまりにも不幸な話だ。俺らが最強の相手と戦う、最悪以外何者でもない。

「クツクツ、てめえらだけに教えてやる。俺は人間じゃない」

それはあまりにも予想通りの発言でビックリはしなかった。したのは次の発言の、最強の盾から生み出された、最強の盾から生み出された……？ どういう意味だ？ 盾から生み出されたと言う事は、誰かに造り出された……？
ならなぜそのような研究を……

「尋君、要はこの男を倒せばいいんでしょ？」

「見ただろ？ ヤツの攻撃は見えない。避けるなんて無茶苦茶だ！」

「誰が避けるなんて言った？」

そう言って取り出したのは……釣竿？

いや、まさか、近くに池があるからって……

「よっと」

「ちよっ、何してんの！ 戦闘中でしょ！」

「こついうときは気分転換が大事なの」

んなの、相手が待つてくれるはずがない！ よりよってあの俺様系の人待つて言う行為は無理がある。

「ぎげやがって……死ねえ！！！」

釣りに集中してる人が他に気が付くわけがない、俺が身代わりになつて……

「どいて、尋君」

小声で俺の名前を呼ぶ、何か思いついたのかわからないが、言われた通りに退く。ズバーン、綾子さんの周りが水しぶきで隠れる。これは……

「鯉！？」

いや、ただの鯉じゃない。物凄くデカイ鯉だ。

「フツフツ、これはただの鯉じゃないわ、爆鯉よ！」

「ば、爆鯉？」

「そう、鱗に当たったらそく爆発。危険な生き物よ」

そんな危険な生き物がこの世界に……

そんな話をしていたら、爆鯉が斬撃を避け、男の胸ぐらに当たる。

綾子さんの言うとおりに爆発する爆鯉。そんな攻撃で相手を倒すなんて……

「くっ……キサマア！ よくも俺様に傷を付けてくれたなあ！」

なっ、何でアイツの顔に傷が……まさか、あの爆鯉のお陰か？

「教えてほしい？」

うわゝ、めんどくさいパターンだ。

「ね、教えてほしい？」

顔を近付けてくるからコクンと頷く。ドアップ過ぎるって。

「しょうがないなあ、尋君がどうしても言うから教えてやるう」

自身有りげな発言。実際アイツに傷を負わしたから当然だが、あんな自身満々に腕組まれるとちよつとイラつく。

「実はね、アイツの弱点って攻撃した後には防御は出来ないの。つま

り、どつちかしか出来ないってこと」

なるほど、だから同時攻撃の時弾かれたのか。それなら理由も納得出来る。

「てめえら、俺様に傷を付けたからには生きては帰さんぞ……」

ドツと相手の魔力が増える。でも、相手の弱点を見つけたからには、何度も同じ手には引つ掛からない。

「たああー!!」

断頭斧で相手の腹を斬り裂く。しかし、防御が高いヤツには少しも効いてない。

「無駄だー……!!!!!!」

断頭斧を掴まれ、壁に投げられる。

「かはっ……」

くっ……身体が動かねえ……

不気味に笑いながらフラフラと俺に近づき、腕を振り上げたその時、グサツと鈍い音がする。見上げてみるとヤツは振り上げたままだった。数秒してヤツは横に倒れこむ。

「ふう、無茶はダメよ」

「綾子さん!」

そうか、確かヤツは防御と攻撃、両方とも出来ない。腕を振る瞬間
防御が解き放たれ無防備になる。

「さすが綾子さんだ」

「褒めてくれてありがとう。さ、大樹に入るわよ」

「ああ！」

強者の弱点（後書き）

どうでしたか？ やっぱあの腐女子は無理がありましたね（ - - ）

そして陽花はメタ発言自重WWW

呪い解放

もう、ダメだ……立ち上がることもすら出来ない。くっそっ……俺らには無理だっつう事なのかよ。

「もう……終わりか？ ふんっ、無駄な時間だった」

身体がボロボロだ。今の俺は相手の殺気の恐怖で動けないのもある。

「まっ、待ちな……さい……」

咲彩がフラフラになりながら立ち上がる。俺よりボロボロなのに……

「諦めの悪いヤツだ。そんなに死にたければ先に死なせてやる」

のしのし、咲彩の方にゆっくりと近づく。そして咲彩の頭を持って遠くへ投げ飛ばす。

「咲彩！」

「うっ……あ……」

次第に俺の感情が高ぶる。自分の心臓の音が早くなるのが気が付く。咲彩が死ぬ、咲彩が死んでしまう。そう思っていると体のそこから何かが湧きだす。

守りたい……そう感じる。でも、俺には無理だ、そんな力は俺にな
い。でも助けてほしい……どうすれば……？

『貴様には何が足りぬ？』

ヤツの黒い剣が、そのモンスターによって折られた。しかも、モンスターなのに喋ったぞ？ もう、何があったかさっぱり分からない。

「この漆黒丸が折られた……？ 貴様、何者だ？」

「俺はマスターのモンスター、フレイムロック」

俺の周りを見るが誰もいない。と言う事は俺の契約モンスターしかありえないという事か。

フレイムロック、いや、俺の契約モンスターにこんなヤツいたか、否、いない。始めてみるモンスターだ。本当に俺のなのが疑問点。

「貴様ア、楽に殺そうとしてやったが止めだ。いたぶって殺してやる」

「そうはさせるか！ マスターは俺が守る。それに……」

フレイムロックは俺の方を向いてしゃがみこむ。これじゃ殴ってくださいと言ってるようなもんだ。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

「あ、ああ、俺は大丈夫だがアイツの方は？」

「ご心配ご無用、アイツは」

フレイムロックが振り向くと徐々にヤツが光りだして苦しみながら消える。

「死にましたから」

この世界にはホントに驚かせてばかりだ。なぜこんなヤツが存在するのか考えるまでもない。そういうヤツが多いのだ、この世界は……

「マスター、霧が晴れました。大樹へ移動なさらないと……」

「ああ」

咲彩をおぶりながら大樹へと向かう。数分して、俺はフレイムロツクにあることを聞く。

「なあ、お前って一体何者なんだ」

「……そう言えば言ってませんでしたね。俺は」

俺の方を向いて衝撃的な事を言いだす。それは誰にも想像もしなかつただろう。

「俺はバーディアとデッドゴーレムを合体したモンスター、と言えはお分りになられますか？」

合体した……？

頭にハテナが沢山あるような感じでうずくまる。何が何だかさっぱり理解していない俺に優しく説明する。

「マスターが避けた瞬間^{トキ}、バーディアとデッドゴーレムはあることを思い浮かんだのです。それはあなたへの思い、と言う事になります。そんな簡単に信じてはもらえないと思いますが、どうか信じ

てくれることを願い申します」

そう思うと、確かにバーディアの炎とテッドゴーレムのいかついガタイで合体したのが納得できる。でも、合体するモンスターなんて初耳だ。

「オーイ！」

「劔飛つ、今までどこほつつき歩いてたんだ！」

「ロン、瑠璃たちもそうだったからあまり攻められない」

ぞくぞくと俺の周りに集まる仲間たち。そうか、あの時の言葉の意味って……

みんなとワイワイしている時、成と魁吏が急いでこちらに向かって走ってくる。結構急いできてるみたいだ、よほどの事だろう。

「た、大変だ！ この呪いの正体が解っちゃった！」

「落ち着くです。伊達君」

息を切らした魁吏達に、自分の魔法で水を差し出す。

ゴクゴクと飲み干した二人はとてつもない言葉を発した。

「最上階にデカイ建物がある。それがきつと動力源だ」

「えっ？ お前らが壊さなかったのか？」

「尋、あれを壊すにはみんなの力がある。だから力を貸してくれ、みんな」

1分間ぐらい皆喋らない。やっぱりダメか、と落ち込む魁史に錬斗さんが言う。

「俺がなんとかする」

その言葉に俺らは村長の助言に気付く。『錬金術師と魔導士』。

「そういう事、行くぞオチビちゃん」

「オチビ言うなです！」

漫才みたいな事を言いながら最上階へと向かう。俺らも着いていこうかなと思っただが、俺らは錬斗さん達を信じるしかない。それに……

「敵のお出ました。さて、俺らはここを死守、絶対に上に行かせるなよー！」

尋の号令で俺らはぞくぞく出てくる敵を倒しまくる。

劔飛SIDE OUT

錬斗SIDE

螺旋階段をずっと上がった先にドデカイ扉がある。コイツは俺の出番だ。

「グラビティ・フィルト！」

思いつき扉を叩く！

するとドゴーンと扉が破壊される。これでなかに入れるな。

「うわゝ、すごいです……」

なかに入ると近代的な機械がたくさんある。大体予想はついていたが、まさかここまでとは……

「さて、始めます」

陽花は意識を集中させて詠唱を唱え始める。そして俺も10分で作成される武器を作成。

10分後、俺の方は出来たが陽花の方はまだ詠唱中。

「陽花、まだか？」

「ちょうど出来たです」

よし、後は陽花の魔法陣に俺の武器を乗せて……

「集え、我が魔術の力よ」

「私の剣に纏、呪を払え」

「マジックレイン！！」

魔法陣と俺が作った即席の剣は光だし、動力源に向かって放たれる。

結果は動力源は消えた。ふう、これで呪いは解けるだろう。

錬斗SIDE OUT

劔飛SIDE

ゆっくりと歩いてきたのは錬斗さん達。どうやら成功したみたいだ。その証拠に段々と敵が退いてきてる。

「お疲れさまです。錬斗さん」

「ああ、お疲れさま」

その後俺らは村に戻って村長に敵は退いたと話した。すると村長は泣きながら俺らにありがとうと言う。

数日後、俺らはまた新たな旅のためにこの村を出るところだった。

「陽花、本当に来ないのか？」

「いいです。陽花には違う大陸に向かう予定ですから」

珍しい、錬斗さんがあんなこと言うなんて。

「あ、俺も違うトコロに行くからここでお別れです」

「そっか、また会えるといいな」

「あえますよ。きっと」

成も成なりの予定があるみたいだ。

「さあて、そろそろ出発するわよ」

急いで綾子さんの船に乗って出発の汽笛を鳴らす。

「じゃ、お世話になりました」

「気を付けるんじゃぞ」

さて、次はどんな事が待っているのか……楽しみだ。

呪い解放（後書き）

こんばんは、グイスです。

ふう、やっと一段落着いたよ。

次回はキャラ設定書いて、少しおふざけとした話を書こうかなと思っ
ています。

やっぱりたまには一休みしないとね。

キャラ設定2

名前：赤根尋 あかねひろ

性別：男性

年齢：19

職業：死刑執行人 エグゼキューションナー

特殊能力：アレス・ハントウェイク
弱者のみ気配を消す

身長：167cm

体重：59kg

髪型：襟足が少し長い短髪

髪色：茶色

瞳：黒

武器：パニッシャー（大地属性）

名前：志木綾子 しんきあやこ

性別：女性

年齢：24

職業：海賊バイレーツ

特殊能力：セツド・カウス
必ず魚や相手を捕まえられる

身長：154cm

体重：47kg

髪型：シルキーロング

髪色：バイオレット

瞳：パンジー

武器：三又鉾（水属性）

名前：水原瑠璃みずはらるり

性別：女性

年齢：17

職業：狙撃手スナイパー・暗殺者アサシン

特殊能力：超視聴

4 kmまで見通し、声や音を拾う事が出来る

身長：162cm

体重：55kg

髪型：膝まで伸びだロングヘア

髪色：青

瞳：はなだ色

武器：ブルーローズetc（属性なし）

名前：伊達魁吏^{だてカイリ}

性別：男性

年齢：21

職業：槍兵^{ランサー}

特殊能力：心臓必中

槍に掛けられた呪いによって主の魔力を食う事で因果を書き換え放つと同時に心臓に必中させる

弾弾き

弓矢、弾丸、魔術など自分に向かってくる飛び道具を死角であつても回避できる

身長：178cm

体重：64kg

髪型：癖毛

髪色：茶色

瞳：オレンジ

武器：グングニル（属性なし）

キャラ設定2(後書き)

こうやってみるとロンが一番年上なんですね。

意外w

まじのヤンチャっ子(前書)

はい、今回は短いです。

るじのヤンデレジョッキ

「……」

こんにちは、瑠璃です。瑠璃は今船のなかにいます。そしてここはロンの部屋です。

「……」

スヤスヤ寝ているロン、可愛い。そして襲いたいです。ああ、理性が吹っ飛びそう……

「……ロン、愛してる」

瑠璃がキスしようとしたら避けられました。もしかして起きてる？むう、今度は色んなイタズラでロンを襲う。

「……って何してんだよ！」

「やっぱ起きてた」

「んな気配立てたら誰でも起きるわ！」

そこまで立ててたのかな？ 自分でもわからない。でも、ロンがそこまで気付くってのはやっぱり愛……ポツ。

「つか、何してんだ？ こんな夜遅く俺の部屋に来て何か用なのか？」

「瑠璃の愛」

「いや、違うから」

意地悪するロンもいいかも……やっぱりロンと瑠璃は惹かれる運命。

『大変よ、バルコニーにてモンスター出現、今すぐ出撃して』

瑠璃とロンの邪魔するなんて……

その時の瑠璃は覚えてない、記憶が飛んだみだから、でも覚えてるとしたらその後のこと、モンスターの残骸がそこらじゅうに落ちていた。

翌日、瑠璃達はとある島で休憩することになった。その島は昔無人島だったらしく、今は結構人が集まっているらしい。

「およ、結構人がいっぱいいる」

綾子が辺りを見回す。何かの大会がやっているのかな？ そんなことを考えていると、ピストルの音が聞こえる。

『さあ始まりました24時間地獄の耐久レース、実況は私、ガワラ
＝コブリンと』

『解説のヤンマ＝クイーンズがお送りいたします』

24時間地獄の耐久レース？ 何か言葉的にスゴそう。

「なんかトンでもない時期に来ちゃったわね」

「知らずに来ちゃったんだから仕方ないよ」

咲彩と天月がイチャイチャして喋ってる（瑠璃だけが……）

「さあて、食料調達にでも行ってこようかね」

ロンが1人で行こうとしている。瑠璃も行く、ロンが浮気するといけないから瑠璃も付いていかなきゃ。

瑠璃達が歩いて10分が経った。今のところロンに近づく女メはいない。

「すみません、このトマトとカボチャ、それとセロリも」

これで何作るんだろう、これだけじゃ何も作れる気が……

あ、今度は肉屋に入った。

「ブタの肩ロースの500を10個、鶏の手羽先を50本」

そんなに買うんだ。

結局は何を買うのかわからなかった。そして変な宿屋に入る。あれ？ 何で宿屋に入るんだろう。何か人でもさがしてるのかな？

「……他の女の人いる」

これは婚約者として放っておけない。瑠璃のロンは誰にも渡せない。勢いでその宿屋に入った。その女の人はロンと楽しく喋ってる。

「殺す……」

ブルーオーシャンであの女の頭をぶち抜く、そうしようとしたが、

ロンがキングカリバーで防ぐ。そんな、瑠璃よりあの女が良いなんて……許せない。あの女を殺してロンも殺す。そしてロンは瑠璃のモノだって……

「やめる瑠璃、何があった」

「瑠璃のロンに近づくムシは削除」

「は、はあ？」

何か困った顔をしているけど気にしない。だって、ロンは瑠璃だけ見てくれればいいもん。さ、ロン。瑠璃と一緒に死のう。瑠璃の、瑠璃のために。

「ちよつ、な、何で乱射してんだよ！」

「好きだから」

「言ってることやってることがムチャクチャだ！」

関係ない、だってもうすぐで瑠璃たちは1つになるんだから。

「落ち着け瑠璃！」

ロンの一言で瑠璃は乱射を止める。

「瑠璃は……ロンのために」

「何があったか知らないが、彼女はここの宿主の娘さんだ。理由としては綾子に頼まれてだな」

「良かった、瑠璃を捨てたんじゃなくて……」

「俺が……捨てるはずないだろう」

瑠璃、ロンを好きになって良かった。もう、後悔はしていない。

るりのヤンデレ日記(後書き)

あれ？ 何でこんな終わり方になるの？ っ
ってツッコミ入れる人は
いないよね？ 答えは聞いてないけど

綾子の姉妹登場！

「暇すぎる」

ある日の昼食に妙なことを言いだす劔飛。無理もない、船を出航してからモンスターどころか他の島も見当たらない。フレイルムロックの修業をしようとしてもモンスターがいなければ話にならない。そんな劔飛に綾子は一枚の紙を渡す。その紙の一番上のタイトルに魁吏以外全員呆然とする。

『バトル 一番強いヤツは誰だ！』

なんとも分かりやすいタイトルだ。参加者資格を見ても誰でもOKと言う文字が視覚に入る。少し怪しいと思う一行は不参加にしようとする。しかし、一番下に優勝景品の『10万G』^{グイル}に一行の目が変わる。グイルとは日本円にして1G＝1000円にあたる。

「す、すげー、これで新しい武器も造れる！」

「フフフツ、燃料も買えちゃうわよ」

「うめえモンも食えるな」

錬斗、綾子、ロン、それぞれの考えが口に漏れる。よほど嬉しいのだろう。

その3人の口が「よし、参加だ！」と強制的に全員参加になった。

翌日、大会のある島へ急行。約4時間ぐらいで着く結構近くの島だった。早速受付をして選手の控え室に移動した。その中に劔飛が見

覚えのある人がいる。それは咲彩の過去なかに入ったときの女性だ。

「てめっ　　!?!」

「何ですか？　初対面に向かって胸ぐらを……しかも汚い言葉を使
つて……」

背負い投げをして劔飛を軽々と投げ飛ばす。いくら後衛でも男子を
軽々と投げ飛ばすなんておかしすぎる、そんな考えをする尋。

他の選手達もこの女とは戦いたくないと願わんばかりに身体を震わ
す。

「劔飛、あの女誰？」

「……えっ？」

劔飛は予想もしてなかっただろう。まさか自分の過去に会った人の
記憶が全くないのだから。

何かおかしいと思った劔飛はその女の跡を追う。しかし、右に曲が
った瞬間彼女の姿が消える。次の瞬間、後ろから気配がするのに気
が付く。後ろを向いてみたら女性が立っている。あれ？　確かこっ
ちに行っただはずじゃ、その台詞が繰り返す。

「あらあら、私を追い掛けるなんて……よほど早く死にたいのです
わね」

妖刀で劔飛の首を狙う。劔飛は力を入れようとしても力が出せない
状態だ。無理に抜こうとしても首が斬られる可能性が高い。決して
そのような命懸けの挑戦をしてはいけないと思うが身動きが取れな
い。そこで劔飛はある確信をした。コイツは絶対あの時の宇鍊刀香

だと。

「ザコには用はありませんが、この際仕方ないですわ」

ゆっくりと妖刀を首に当てようとした瞬間、槍が刀香の頭めがけて投げられる。それをいとも簡単に避ける刀香。そして投げた本人は魁吏であった。なぜここに魁吏がいるのかと言うと、劔飛の行動が怪しすぎるので付いていったら案の定。

しかし、これで1：2、さすがの刀香も2人相手じゃキツイ、そんな甘い考えが後々後悔することになるだろう。

「私も戦いたいのは山々ですわ、ですが、ここで問題が発せれば出場が出来なくなりますわ」

そう言つて妖刀を収める。劔飛達にとつてそれは幸いだ。そして魁吏には分かっていた。刀香が何者なのか、その妖刀に異様なオーラが漂っている事を……

試合開始は明日の昼頃。その間まで暇している劔飛達に新たな招かざる客が現れる。その正体は、ピンクの髪をしていて瞳はマリンプルー、何かと綾子と似ている。

「あ、綾子ちゃんだー」

そう言つて彼女は綾子を後ろから抱きつく。抱きつかれた綾子は黙つて淡々と食事を続けている。

半面、劔飛達も何が起こっているのかさっぱり分からない状態であった。それはそうだろう、いきなり現れた見知らぬ人に知り合いがいきなり後ろから抱きつかれたら誰だつてそう思うのが普通の反応。

「も、お姉ちゃんがせつかく探しに来たのにその態度は何？」

「……何の用なのよ、お姉ちゃん」

その場にいた全員が「お姉ちゃん！？」と叫ぶ。他の人から見れば何事だ、の目が綾子達に向かう。痛い視線に耐えながら実の姉妹が聞き出す剣飛。

「えっと、綾子さんとそちらの方は……」

「姉妹よ、残念なことに」

「え、綾子ちゃんひどーい」

そんな茶番をしていると、魁吏が恥知らずなことを言う。

「年はお幾つなんですか？」

失礼にもほどがある、一行がそう思った瞬間。いつのまにか綾子の姉は魁吏の後ろに立つ。凄まじい速さとだ、皆思っているが、綾子だけは思っていない。やれやれ、と口に出し、姉のところに行く。

「海姉、言いたいことは分かったから手を離そ」

綾子に言われ渋々手を離す。何か言いたそうな顔をしているが、あえてスルーする綾子。そして地雷を踏んだ魁吏は、ガクブルしている。よほど怖い思いをしたのだろう、今の魁吏を見て誰もが思う。

「あれ？ ここにいるってことは海姉もしかして……」

「そうだよ、お姉ちゃんも出ようかなって思っの〜」

「はあ、まあいいわ。改めて紹介するわ。私の姉の……」

「水澤海音です、よろしくね〜」

「えっ、ちょっ、綾子の姉なのに名字が違うってどういこと？」

「うん、まあ、実は私たちの親は離婚しちゃったんだ。私は母、海姉は父に引き取られちゃったからね」

「あ、いや、すみません。辛い過去を……」

スゴい事を発言する綾子に、その話題を振った咲彩は面目なさそうに頭を下げる。それでも綾子はいいのよ、と言って許してくれる。日もいい頃合いになり、そろそろ宿に泊まるご一行。海音は別の宿で泊まることになっているので、ここで別れを告げる。

「ふう、結構食った」

帰り道、ロンが腹を擦って満腹そうに言う。それを見た瑠璃はロンに夜の運動をしようと言う。さすがに止めるロンだが、尋がこう言う。

「あゝあ、何だよ。つままないな」

「つままないとはなんだよ！ さすがにマズイだろうっ！」

「瑠璃は……OK」

「お前がOKでも俺がダメなの！」

等とハレンチな会話が後ろから聞こえる中、咲彩はあることを思っている。

「夜の……運動……剣飛と……」

ボンツと聞こえそうな感じに顔が赤面する。純情な少女はハレンチなことを考えると顔が赤面になるのだ。しかし、彼女の赤面は頭からも煙が出るぐらいかなりの赤面だ。

「大丈夫か？ 咲彩」

「だ、だ、大丈夫よ！ 別に剣飛のことなんて何にも思っていないだからね！」

「は？」

「あ、いや、な、何でもない！」

いきなり剣飛の話題になったと思いきや、今度は何でもないと来た。相当変だと思いつく。剣飛は当然咲彩の気持ちもわからないだろう。

綾子の姉妹登場！（後書き）

瑠璃がエロい娘になった！ 大変だよ！

さてさて、新章始まりましたトーナメントバトル編。いや、楽しみですねえ。

オリキャラもどんどん募集しちゃってます。日本の名前だけでなく、外人の名前もOKです。

キャラ投稿の仕方は活動報告にあります、それと質問コーナーも受け付けます。このBWで疑問がある方は感想欄へ。

トーナメント 第1回戦

大会当日、最初の組み合わせがモニターに移る。最初の試合はロンVSアルト。Kはセリックと言う精霊使いだ。接近戦のロンにとっては好機な試合。

「初めまして、Mr・ロン」

「へっ、何がMr・ロンだ。馴れ馴れしい」

ロンとアルト以外リングの外に出る。瑠璃がリングの外に出ようとしたとき、ロンが呼び止める。何かな、と思い振り向くとロンの唇と瑠璃の唇が重なる。

「んっ……あむ……」

「絶対に勝つ」

「……頑張つて」

ニカッと笑ってリングへ戻るロン。そのキスの力で何倍にも増す。

「おやおや、いきなり見せ付けてくれます」

すでに詠唱して出した精霊を使って不意打ちを狙う。

「ねー!」

サラマンダーの火炎でロンは炎に包まれる。誇りきつた顔で去ろう

とするがレフエリーに止められる。なぜだと抗議するアルトだが、ポンとアルトの肩に手が乗っかる。振り返ってみると、ロンが炎を纏って立っていた。本来ならありえないのだが、瑠璃とのキスで防御・攻撃が上がったのだ。

「あ、ありえない！ この僕の炎が効かないなんて！」

「いや、実際効いてるぜ？ でも、まだ劔飛の炎が熱い」

キングカリバーを大きく振り上げる。するとキングカリバーが燃えるように紅くなっていた。ロンは振り上げたキングカリバーをおもいっきり振り下げる。

戸惑うアルトに容赦なしに襲い掛かる斬撃。いつものと違うロンと感じる劔飛達だが、ロンと関わりのない者に比べるといたって普通の状態。それほど絆が高いのだろう。

「ご、ごめんな」

「謝って許されるとでも？」

「ひっ、ま、ママ……」

「王よ、この者に審判を」

キングカリバーを地面に叩きつけ、カチッ、カチッと5回音がする。するとキングカリバーの形状が炎の形になり、熱気もする。

「これって……」

尋が思い出すようにつぶやく。

「燃えよ、フレイム・セイバー火炎の剣」

形状が変わったとともにロンの姿・装備も変わっている。髪は金から深紅になり、膝まで伸びた髪。身体には鎧を纏っている。

「そうか、あのキングガリバーはロンの感情とリンクしていて、それによって属性が変わるんだ」

炎は怒り、水は悲しみ、雷は喜び、風は楽しみ、それ以外にもあると言われているが未だ不明。

現在ロンが抱いてる感情は怒り。不意打ちを食らったからそれで怒っている。

「そ、そんな……そんなの反則だよ！」

「さあ、大人しく俺に殺されるか、不意打ちやら卑怯な手を使って逃げているだけの人生を送るか」

「う……うめんなさああああい!!!!!!」

泣きながら去るアルト。これでロンは第2回戦進出。

「お疲れロン」

「……ああ」

リングに下りるや否や、ロンは体調がすぐれない。そう、今ロンは覚醒をしていたのだ。覚醒は体力などが大きく消耗する代わりに、職業によって装備なども異なるが、職業の真実の姿ホントになる。

「とりあえず、ロンは2回戦まで休ませる必要があるな」

錬斗がロンを抱き抱え、移動しようとした時、瑠璃がロンの肩を支える。

「瑠璃が運ぶ」

そう言ってせっせとロンを宿に運ぶ。やはり心配なのだろう、好きな人が出来てその相手が今倒れているんだから。しかも、ロンの体格と合わないからズルズルと引きずるしかない。

「ここは瑠璃に任せましょ、私たちはバトルに専念よ」

ロンが休んでいるから今の最年長は綾子だ。それなりの責任感はある。だからときばきと動くのだろう。

次の対戦は尋と豪烈神こうれつじん 彩華さいかだ。尋は彼女をとんでもない人だと想像した。

「ん〜、すごい殺気だな」

「へえ、アンタがあたしと戦う相手か、何か強そうだな。よろしくな」

「そうだな」

リングに移動し、両者とも構える。

「開始！」

審判の合図とともに2人とも動く。2人とも同時だからどちらが有利かわからなくなる。

「エレキッドウェイブ!」

彩華は右フックを打つと、その手から電撃が出る。避けることが出来ずもろ食らう。

「なかなかやるねえ、でも、俺も負けちゃいないよ!」

パニッシャーをブーメランみたく彩華に投げ付ける。しかし、彼女は左の足でパニッシャーを返す。それに絶句する一同。尋のバトルスタイルはメンバー内で知っているのは魁吏と錬斗だけだ。

「尋の攻撃もスゴいけど、あの彩華って子もすげえ」

「チツ、チツ、尋の攻撃はまだまだだよ、あれは敵の能力を計るためだから力の半分も使ってないはずだ」

劔飛の感想に錬斗が返す。それに絶句する一同は一斉に尋に注目する。劔飛はあれで半分も使っていない、そう呟く。

「あれ? そんなもんなの?」

「まさか、これは単なるお遊びだ。俺の強さはハンパないぜ!」

ニカッと笑ってパニッシャーを地面におもいつきり突き刺す。

「ギガロック!」

どこから出てきたのか、岩が幾つにも分裂し、彩華にめがけて攻撃。

「甘い甘い、力の消滅パワーアニシユ!!!」

しかし彩華は素手で岩を破壊。彼女のパワーは少なくとも尋よりある。どう考えても尋が不利、誰もがそう思っているが魁吏と錬斗だけは違う。魁吏達は彼の本当の強さをしっているからだ。

「やっぱりそんな簡単にやられるわけないよね」

「何？ 怖じ気づいたの？」

「いんや、ゾクゾクするだけだ」

「そうなの？ まあいいや、そんなお喋りより早く戦おうよ」

「だ、な!」

横に斬り付ける。対する彩華も純白のプロテクターでガード。その攻防を約10分間続けている。さすがの2人も体力の限界だ。

「やるね、アంత」

「そらどうも、さっさと決めさせてもらおうぞ」

「だね」

お互いに構えて渾身の一撃。一瞬煙が出てどちらが立っているのかわからない状態だ。どっちだと疑問視する観客だが、すぐに煙がなくなる。そして最後に立った者は……

「はあ、はあ……勝った……」

彩華だ。紙一重の差で尋が負けたのだ。

「つ、強エな。お前」

「アタシはアンタのほうが強いと思ったけどな」

互いに握手してニコッと笑う。これほどいい試合はないだろう。そして、これからの試合もいい試合が続きだろう。

トーナメント 第1回戦（後書き）

はい、スランプ状態のヴィスです。始まりましたねトーナメントバトル。第1回戦。どうでしたか？ 最後はちょっと無理矢理な感じがしましたが……

感想を書いてくれる方にはホントに感謝しております。まだまだ未熟者ですが何とぞよろしくお願いします。

さて、話は変わりますが、私ヴィスは18歳を迎えました。そこですが、ノクターンを書いてみたいと思います。誰×誰を書いてほしいか感想にて書いてください。ちなみに最初は瑠璃×ロンです。

トーナメント 第1回戦 PART2 (前書き)

すみません、遅れて。如何せん展開を考えてしまうのに時間が掛か
って。

トーナメント 第1回戦 PART 2

無事1回戦を突破したロンは医務室で体を休ませている。医務室の中のモニターでバトルの中継を行っているため、病室内でも誰が勝ったか分かる。

「尋が負けたか……」

ポツリと呟くロン。それを心配そうに看病する瑠璃。

やはり好きな人がいると人は変わるものだ。以前の瑠璃だったらこんな優しいことはしないだろう。それも全部ロンのお陰というもの。ロンと瑠璃が試合会場に戻ると、次の試合は終わっていた。

「誰だアイツ」

「戻ってきたのか」

「それより、アイツ……誰かに似てるようだが……気のせいかな？」

ロンが気にしているのは真紅の髪に瞳の子。瑠璃に似ているが、瑠璃のほうの胸は残念。

剣飛は3秒ほど間を置いてしゃべり始める。

「水原^{みずはら} 紅音^{アカネ}、名字からして水原の姉妹なんだが……」

「覚えてない……」

少し体をふらつきながらも答える。

「大丈夫か？ 無理しないで棄権したほうが」

「だい……じょう……ぶ……」

見るからに大丈夫じゃなさそうな感じがするが、大丈夫と強きを見せる。ここが瑠璃のスゴいトコである。

「無理だよ、今の水原さんじゃ……」

「瑠璃の……瑠璃の体は……自分でわかってる……」

そう言っただけでロンの服の裾を掴む。その時の瑠璃はスゴく可愛らしく、抱き締めたいぐらいだった。しかし、次の試合は瑠璃VS城島 王覇だ。

瑠璃と王覇はリングに上がり、審判の合図でお互いに動く。

「愚民が、我に逆らったことを後悔するがいい」

妖刀を堂々と構え、大振りをして大地が吹き飛ぶ。スゴい威力だ。

「っ……」

かなりの氣で瑠璃は押されている。

「この程度で我に刃向かうとは……その心意気や良」

そう言っただけで妖刀を振り上げ、満月のように円を描く。

「うげつひょうりん
雨月氷輪」

素早く十字に斬る。しかし、バック転で瑠璃は避け、ブルーオーシヤンで王覇めがけて狙い撃つ。

「ほう、私の攻撃を避けるとは……褒美をやるう」

スチャツと妖刀を鞘にしまい、再びゆっくりと抜く。

「らいげつしゅうはい
雷月豪灰」

「……っ!？」

危ない、そう思ったときには遅かった。体全身切り傷だらけで、立つことはおろか、ハンドガン握ることすら出来ない状態だった。危険だと察した審判は止めに入る。運良く瑠璃は軽傷で済んだ。

「瑠璃! 大丈夫か!」

ロンがすぐに駆け寄って脈があるかどうか確かめる。

「安心しろ、我はこやつを殺したりはしない」

「良かった……」

結局瑠璃は敗退、勝者は王覇になった。

次の試合は劔飛達は出ない。見るだけである、敵の攻撃パターンを読み取るのも1つの修行、だから劔飛達は控え室のモニターで試合を観戦することになった。

「次は……なんて読むんだ?」

「天野あまの 夜葉音ヤハネ VS 水澤海音、私の姉か。大丈夫かなあ」

不安そうな顔でポツンと呟く。何せ彼女は戦闘中でも寝るから妹が心配するのも納得。

綾子はゴクリと唾を飲む。

「ふわ〜」

「倒す」

審判の合図で夜葉音が動く。しかし海音はまだ眠たそうであくびをしている。

一気に近寄って攻撃、砂煙が邪魔で2人の姿が見えない。

「も〜、お姉ちゃんビックリしちゃったでしょ〜」

「効いて……ない……?」

2つのサーベルで夜葉音の剣は止められる。スタツ、スタツとバツクステップで元の位置に戻る。

「終わり」

夜葉音の言葉で海音の服は段々と破れていく、最後に残ったのはブラとパンティだけになってしまった。それに対して海音は

「あらあら〜?」

全く動じず、何も隠さない状態で座っていた。

「ちよつ！ お姉ちゃん！」

「劔飛！ アンタは見ちゃダメ！」

「ロン、あんなのより瑠璃の……」

「1人おかしいのがいますけど!？」

綾子、咲彩、瑠璃は慌てて男子勢の目を布とかで隠す。この試合の勝者は夜葉音、1回戦突破。こんなバトルしてるなかあの男が動き始めようとしている。

「天月劔飛……このバトルワールドはそう甘くはないぞ」

「お茶をお持ちしました、レンカ様」

「そこに置いていてくれ」

「はい」

お茶を飲んで一息つく、レンカとは劔飛や咲彩達をこの世界に来させた張本人、一体彼は何者だろうか。

場所は移って闘技場。今度の戦いは劔飛VS咲彩だ。この戦いは口ンたちにとってスゴく見たい戦いである。

「お手柔らかに」

「無理」

ニツコリと笑って拒否をする。劔飛はこんな予想はついていた。

劔飛と咲彩は一番最初に組んだタッグ、2人が争うことはあまりなかった。2人にとってこの試合は願ってもいないことで、大切な思い出になる試合である。

「出だよ、フレイムロック！」

「最初から飛ばしていくわよ！」

アイシクルをフレイムロックに突き刺す。かなり効果的に見えるが、『岩』の属性も持つフレイムロックは効くはずがない。

「咲彩様、それがホンキならがっかりです」

「あら？ いつ私がこれがホンキだと」

一回アイシクルを抜き、ザン、ザンと斬り付ける。

「言ったー！……！」

「くっ……」

「大丈夫かフレイムロック！」

「まだまだです。マスター、指示を……」

ゆっくりと立ち上がり構える。それを見た劔飛は平気だなと確信する。

「フレイムロック、ジャイアントハンマー！」

腕を大きくして咲彩めがけて腕を振り下ろす。
左に横ステップ移動して避け、左ななめ上から攻撃する。

「速い、そんな……」

「さ、これで終わりよ」

そう言っつてリングを去ろうとしたとき、突如観客席が爆発する。混乱する観客達を静めようとする警備員だが、観客は大混乱をしているため言っつことを聞かない。

「何事よ!」

「とても嫌な予感が……」

咲彩と劔飛との会話に慌てて鍊斗が入る。

「マズイぞ劔飛、何者かがこの会場を破壊しようとしている。俺らも逃げたほうがいい」

奴らは強い、そう言っつて鍊斗は劔飛達に言っつて逃げようとする。しかし、劔飛と咲彩は違う。恐れどころか、ゾクゾクしている。

「咲彩、言わなくても分かるよね」

「ええ、楽しい大会が台無し……その代償は死んで償うべきよ」

ゾクツとする。鍊斗さえゾクツとする殺気はそうないだろう、ましてや年下の子に。

「ま、止める理由はないわな」

劔飛、咲彩、錬斗、それぞれが構え、敵が自分達のところまで来るのを待つ。

1人の敵が劔飛のところに来る。かなり速いスピードだ。

「フレイムロック、火炎覇！」

「はっ！」

炎を纏った拳が敵を討つ。

「さあ！ 次は誰だ！」

トーナメント 第1回戦 PART2 (後書き)

ただで終わるはずがない！
それがヴィスクオリティー

辛い過去と今の自分

劔飛達がリング内で戦っているまっただ中、ロンたちは観客席で戦っている。

「コイツ、倒しても倒してもキリがない！」

「くそつ、何でこんなこてになるんだよ！」

ロンと魁吏とタッグを組んで敵を薙ぎ倒す。

「ロン、後ろは任せたぞ」

「そつちも、な！」

斬っても斬ってもキリがない、しかも次々と空から湧いてくる。

一方、瑠璃と綾子は

「お姉ちゃん！」

姉の海音のところへ行く。何をしに行くのか、瑠璃もそつ思い付いてていくことにした。

「瑠璃……」

いきなりの呼び掛けに止まる瑠璃、振り向けば自分と同じ感じをした女性が瑠璃のことをボーツと見ている。その時、瑠璃に激しい頭痛が襲い掛かる。

「うつ……あああああつ……！！！！！！」

悲鳴が廊下に響く。瑠璃の脳内は混乱していた。『瑠璃はあの女を知っている』その言葉だけが脳内を巡る。

幼い瑠璃は親、友達さえにも虐められていた。小学生からずっと、中学1年までは

彼女は中学1年に入ると、1人の男に声を掛けられ攫さらわれる。その人は暗殺を仕事とする1人で、瑠璃をそこに入れると上の人に言われる。その男の名はマルスⅡSⅡアールヴ Heim、裏では有名な暗殺組織だ。

突如攫さらわれた瑠璃は何も動けず、身動きが取れない瑠璃は睨め付けるしかない。

数時間後、瑠璃は東京の渋谷に着いた。その場所はボロい廃工場でかなり薄暗い。ドスンとボロいソファーに座ってマルスが登場する。「早速だが」と瑠璃になぜここに来させられたか説明する。

「復讐……」

そう言つて瑠璃はそこら辺に落ちていた銃を拾つて家族、友人などを殺しに出かける。その目は獣を狩る目をしていて。その後瑠璃は姉とともに家族と友人を殺し、マルスⅡSⅡアールヴ Heim をリーダーとした組織 黒き月に引き取られ、暗殺の世界で生きていくことになった。

「思い……出した」

すべてを思い出したかのように目を大きくして少し後退る。紅音は
どんとと瑠璃と近づき、とうとう行き止まりになりいきなりキス
をされる。それが嫌になり、無理矢理退けるように押す。腕でこし
ごししてさも汚いものを落とすように擦る。

「瑠璃、戻ってきなさい。こんな臭いところにいたら体が腐ってし
まうわ」

「行けない……」

「どうして？」

「……」

何も言わず魔法陣から銃が出力して、ブルーオーシャンが出てくる。

「変わったわね、色々な意味で」

横髪をクリクリとしてびくりとしない。まさにその攻撃を知ってい
るかのように避ける。

「何？ そんなものなの？ 私のいない間怠けていたのかしら？」

「……っ」

ギリギリと歯ぎしりが聞こえそうなくらい歯に力が入る、そのくら
い悔しいのだろう。

「じゃ、私もホンキで行くわよ。そして瑠璃を」

言い掛けたとき、1つのドデカイ三角定規が飛んでくる。2人は戦いを止め、飛んでくるほうへ目を向けて構える。

「あちゃ〜、外しちゃったか〜」

「よく狙え」

「ノーコン」

「うっさい！ 僕を怒らせると化学反応が起こるぞ！」

「意味不だ、もう少し分かりやすい例えはないのか？」

そんな茶番を見ていると、尋と合流する。これで3対3だ、と中学生ぐらいの少年が喋る。そして、その少年の横に2人の少女がいる。1人は黒髪をしていて、もう1人は少年っぽい髪をしている。

「……一時休戦」

「そうね、この子を達にお灸を据わせて上げる」

「ガキがこんなところで遊ぶなんて感心しないな、ガキはガキらしくお家帰ってママのおっぱいでも吸ってるか勉強でも励んだほうがいいぞ」

瑠璃、紅音、尋は構え、いつ来のかを図ってる。

「スノウ、バース、お前らは2人の女を、俺はあの男を殺る」

「「御意」」

そう言つて3人はバラバラに別れる。尋達がこの厨二っばい中学生と戦っている中、夜葉音は別の人に追い掛けられている。

「夜葉音ターーーン!!!!!!!!!! 僕を！ 僕をもつと虐めて下さー
ーい!!!!!!」

「来ないで」

それは数時間前のことだ。

夜葉音が着替えようと更衣室に行こうとしたとき、1人の男性が夜葉音のロッカーをあさり、しかも夜葉音の（脱ぎたての）パンティを被っていた。

「ハア、ハア、夜葉音タン……」

それを見た夜葉音はお仕置鬼剣おしおきけんを取出し、夜葉音のパンティを被っている男性を叩く。しかし彼は

「や、夜葉音タンの……お仕置き……」

「ひっ！」

あまりの気持ち悪さにかなり引いてしまう夜葉音。無理もない、この男は夜葉音が元いたパーティーの1人で、何度も何度も襲われそうになったことがある。顔はかなりのイケメンなのに極度のDMな

のだ。

「僕は夜葉音タンのためなら例え火のなか水のなかだよ！」

「じゃ、燃えて死ね」

「へ？」

突然現れた男、彼は魔法陣から獄炎の剣を召喚して変態を斬る、が。

「夜葉音タンののは死ぬけど、それ以外のは効かないよ」

効かない。マグマほどの熱さをする剣だ。それなのに効かないのはおかしい。

「ふう、パパから貰った神呪のマントが役に立った」

「誰？」

「ただの魔法騎士だ、名を名乗るものじゃない。それより、怪我はないかい？」

「うん」

中がよさそうに見えて、変態はスゴく不機嫌になる。

「夜葉音タンは僕のモノだ――！！！！」

怒りが爆発したのか、鼻息が荒くなる。

「僕の名前はアンダーショット！ 君を倒す名だ！ そして夜葉音
タンのよm　ぐえっ！」

「おお、ナイスボール」

「……」

無言でゲシゲシと蹴る。夜葉音がアンダーショットを蹴り終えて、先ほどの男に例を言おうとする。しかし、男の姿がない。辺りを見回しても姿は見つからない。場所を移して尋との戦い。

「たあっ！」

「いつ……！」

「ガキがこんなところで遊ぶなんて……世の中は腐っちまったな」
タンをはいてぶつぶつと独り言を言う。

「さあ、トドメを……」

「言われなくても……」

断頭斧で首を切り裂く。

「処刑執行人は残酷だ」

尋はそう言っただけ。所変わって瑠璃とバース。

「……………」

ガシャンと弾を装填して、バースに向かって放つ。

「あなたの攻撃、見え見えだよ！」

定規を使って瑠璃に近寄るしかし

キングカリバー
ウォーターウィップ
「王の大剣、水の鞭！」

水の鞭がバース目がけて攻撃する。

「うあつ！」

「はっ！ たアツ！」

ベシン、ベシンと2回振り回す。

「いつ……………たあ……………」

「立て、俺は今悲しいんだ。俺の大事な仲間を……………許さん！」

バースの顔を足が着かないぐらい持ち上げ、メキメキと音がする。

「ガキの分際で調子に乗るなよ」

ブンと壁に投げ付ける。バースは痛い感情に恐怖と言う感情も抱いていた。

「あっ……ああ……」

恐ろしい、彼女の頭のなかはそればかりだ。

「去れ、今の俺は残酷に殺しかねん」

「は、はい……」

そう言っただけで去るバース。そして紅音VSスノウも決着が着きそうだ。

「やるわね、でも、私は瑠璃を手に入れるまで死ねないの」

「……ッ！」

グサツとスノウの胸に何か刺される感覚がある。それは

「鎖……？」

深紅色の鎖であった。

「綺麗な花には刺がある、ね」

ニツと笑い、鎖をおもいつきり引っ張る。

辛い過去と今の自分（後書き）

うわゝ、紅音怖ゝい。そしてアンダーショットさん乙！ 秋代さんの想像を上回りましたね。

ロリコン+ドM+変態……これは行き過ぎか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845u/>

BATTLE WORLD

2011年11月20日20時27分発行